730
730-430
1200501589451

改造文庫
第二部　第三百六十一篇

全釋俳諧七部集
（第二卷）

猿蓑集

篇前

萩原蘿月著

改造社出版

621
帝國圖書館藏

改造文庫
第二部 第二百六十一篇

全釋俳諧七部集
（第二巻）

猿蓑集
（前編）

萩原蘿月著

改造社出版

730
430

目次

一、解題……五
一、凡例……一五
一、晉其角序……一七
一、猿蓑集 卷之一……二五
一、猿蓑集 卷之二……八八
一、猿蓑集 卷之三……一七〇
一、猿蓑集 卷之四……二三四

解說

撰者　向井去來、宮城凡兆共撰。撰者の略傳は「全釋俳諧七部集」第二卷後篇卷末作者列傳の條下に記した。

題名　卷頭の「初しぐれ猿も小蓑をほしげ也」といふ芭蕉の發句から付けたものであらう。其角の序に、「我翁行脚のころ、伊賀越しける山中にて、猿に小蓑を着せて、俳諧の神を入れたまひければ、たちまち斷腸のおもひを叫びけむ。云々」とあつて、此句が奥羽行脚以後の芭蕉の變風を代表させ得るものであるといふ見地から、取つて以て撰集の題名としたのであらう。

傳本　半紙本二册。元祿四年、京、井筒屋庄兵衛開版。普通白茶の表紙本が流布する。西馬の「標注七部集」の頭註によると、其角の序は、元祿の製本には、年月筆者の一行があつたから、首に其角序と書いた、然るに一帖の疊紙を惜み、後年書肆が拔き去つて了つたものといふ。

諸本　「俳諧七部集」の一書ではあるが、後世の校本七部集、例へば西馬の「標注七部集」、精衛道人の「訂正七部集」、羅齋の「校正七部集」、龍守の「校正七部集」、五律の「正改新刻七部集」等にも收められる。集中の四歌仙は、蝶夢の「俳諧集」、曉臺の「幽蘭集」、甘井の「金蘭集」、奇淵の「袖草紙」、湖中の「一葉集」、默池の「袖珍鈔」、其他近頃の「芭蕉全集」中に入る。又四歌仙中市中やの卷には、也寥禪師傳來の草稿と、秋元酒汀藏の眞蹟とあるが、二者同一ではない。

內容　六卷二册。序は晋ノ其角。跋は丈草。發句三百八十二句（芭蕉四十一・凡兆四十二・去來二十五・其角二十五・其他嵐雪・丈草・杉風・曾良・史邦・倚白・路通・憔然・正秀・智月・乙州・珍碩・路通等）歌仙四卷（去來・芭蕉・凡兆・史邦四吟一卷、凡兆・芭蕉・去來三吟一卷、凡兆・芭蕉・野水・去來四吟一卷、芭蕉・乙州・珍碩・素男・智月・凡兆・去來・正秀・半殘・土芳・園風・猿雖・嵐蘭・史邦・野水・羽紅十六吟一卷）、幻住庵ノ記、凡右日記を含む。

成立　芭蕉は元祿三年四月幻住庵に入り、四年の春を粟津の無名庵に迎へ、四月嵯峨の

落柿舍に遊んだ。「猿蓑集」は此間に成つた。撰者は去來と凡兆であつたが、芭蕉の嚴重な指導の下に成つた。編輯の場所は嵯峨の落柿舍であらう。去來の心では「冬の日」、「春の日」は小册子であり、尾張中心の物である。「曠野」は必ずしも正風に純な集とは考へられない。芭蕉の俳諧も奧羽行脚以來一變した。その新風を代表した一撰集があつてもよからう。それには芭蕉の正斧を得た、末代の龜鑑たるべきものでなければならないと言つたやうな抱負と熱心を以て、編成に從事した事であらう。芭蕉の方でも、これ迄の撰集とは異つた態度で、此集を監修したやうだ。例へば其角の「此木戸や鎖のさゝれて冬の月」に就て、作者は冬の月にしようか、霜の月にしようかと迷つて居つた所、芭蕉云、其角が冬霜に煩ふ句でもないと言つて、冬の月に定めた入れた。初は文字詰り、柴の戸と讀めたが、出版の後大津から手紙をよこして、柴の戸ではない。此木戸である。かゝる秀逸は一句も大切であるから、出版後でも急いで改めるがよいと言つた事、史邦の「泥龜や苗代水の畦うつり」に就て、去來誤つて畦づたひとして入選した所、芭蕉云、畦づたひと畦うつりとは形容・風流各別である。殊に畦うつりして蛙鳴くなりとも詠まれてゐる。肝要の景色を誤

る事筆の罪のみではない。句の理解が愚なる故であると言つて、機嫌がわるかつたといふ事、萬乎の「田の畝の豆つたひ行くほたる哉」、此句は元芭蕉の直した凡兆の句であつた。

「猿蓑」撰の時、凡兆は見所がないから除かうといふと、去來は豆を傳ひ行く螢の光、闇夜の景色、風姿があると言つたが、凡兆は承知しない。芭蕉云、凡兆が捨てるならば、わしが拾はうと、丁度萬乎に似たやうな句があつたから、萬乎の作として入選したといふ事越人の「月雪や鉢たゝき名は甚之丞」といふ句は、伊丹の集に「彌兵衞とは知れどあはれや鉢たゝき」といふ句があつたから、入集いかゞと伺つた所、芭蕉云、その心ざす所は違つてゐるが、句に於て紛らしいから、遠慮したらどうかと言はれたといふ事、乙州の「其春の石ともならず木曾の馬」は、勝れたといふわけではないが、入れたらどうかと指圖されたので入選したなどといふ記事を讀んだならば、芭蕉の助力も普通でなかつた事が分らうと思ふ（去來抄・湖東問答）。又芭蕉は本集に於て翁を改めて芭蕉と書かせた。之は元來其角の意見で、同門の人々が芭蕉を尊んで翁と言つたばかりでなく、他門の人まで翁と言つてゐるから、門人が翁と書いても差支あるまいとあつて、其角の集に翁と書いたといふ

のであるが、芭蕉は之を嫌つて、自門同志の間なら翁でもよろしいが、世に廣め、人に知らせるには、却て不謹愼であらうと言つた（旅寐論）。この芭蕉の心情を考へても、芭蕉は本集を以て正風の眞髓を天下に知らせようとした意圖があつた事も分らう。其他「去來抄」によると、凡兆の下京やの句の上五を芭蕉が確信を以て定めたり、游刀のつかみあふ子供のたけやの句に就いて、撰者間になれる・なれぬの論戰もあつたり、越人の散る時の心やすさよの句は、其角・許六の難はあつたが、去來聞かずして入選するなど、實に去來の忠實な熱心な選句振は、本集を蕉門龜鑑の集たらしめるのに十分な努力であつた。「花屋日記」の記事ではあるが、猿蓑撰成り、吟聲の際、わざ〳〵深川から鳥羽の文臺を取寄せたといふが、それほど猿蓑の撰は芭蕉に取つて大切であつた。

價値　本集は古來非常に尊重された。許六は「宇陀ノ法師」に、「前猿蓑は俳諧の古今集也。初心の人、去來が猿蓑より、當流俳諧に入るべし。云々」、支考は「發願文」に、「猿蓑集に至りて、全く花實を備ふ。云々」、風國は「泊船集」の序に、「瓢・猿蓑出來て、新しき風流を起し、正風の腸を見せ給ひ、云々」、加興は「俳諧本來道」に、「全く行の體を

題し、花實・姿情悉く備りて、誠に萬代不易の流行、俳諧の古今集といふべし。云々」などと稱揚された。その影響として本集は、蕉風三變論の中心撰集となり、去來・支考・嵐雪の說以來、この論は定まつて了つた。秋田の五明は、蕉風の變化を三品に分ち、貞享初より四年までを眞の格、元祿初より三年までを行の格、元祿四年より七年までを草の格と定めてゐるが、行の格には猿蓑が中心になつてゐる（小夜話）。とにかく本集が蕉風三變の中心であつた事は、古來一般に認容された事で、淡々などは猿蓑・炭俵を一日見ないと、眼に霞がかゝつたやうだと言ひ、梅通は文化に猿蓑を撰すなどと言つて、天明以降の風調を七部集の各時代に割當てゝ論じてゐるやうに、末へ行けば行くほど、本集の價値が偉大視されたのであつた。

風調　本集は一體に氣品高く、情趣深く、淸寂で、蕉風の劃期的撰集として、決して恥しからぬものであつた。曲齋は「婆心錄」に、「風調は地を專にして、風韻を主とし、高雅なるもの冬の日に似ず、曲節なるもの瓢に反して、ひとり當時の一體と見れば、世擧りて俳諧の花實全備たりと稱して、爰にとどまる事しばらくあり。云々」と論じてゐる。併し撰者去來と凡兆の間には、趣味や標準の異なる所があつた。「猿蓑」撰の時、芭蕉の「病雁の夜寒に落ちて旅寐かな」、「蜑の家は小海老に交じるいとゞ哉」の句に就いて、撰者の間に論があつた。凡兆は小海老の方が句の取合新しく、誠に秀逸だと言ふし、去來は小海老の句は珍しいけれど、自分にも言へさうだ、病雁は格高く、趣かすかで、なか〳〵こゝ迄は考へ付くものでないといふ。此論は恐く二者の趣味の相違を代表的に物語つたもので、凡兆は句法の緊密した印象的な客觀表現を好み、去來はどちらかと言へば生溫い表現で、句の餘韻・餘情を尊重した。從つて選句の場合に、二者の間に相當な議論の起るべき事は當然で、結句芭蕉の裁斷で決めた場合も多かつたらうと思はれる。本集を讀んで行くと、かゝる兩傾向の句に逢著する。即ち寫實的な印象句もあれば、情趣の勝れた句も入つてゐるが、又一面生溫い、わざとらしい、月並臭い句も多かつた。併し此點は去來の熱心な努力を買つてやつて、あまり惡るく言はない方がよいかも知れない。

本集の連句は天下後世の龜鑑であり、渴仰ともなつた。寂といふ情調は發句もさうだけれど、連句に於て實によく統一的に味到される。複雜した人事でも、單純な田園の光景で

も、その配列に抑揚があつて、巧に變化してゐる。恐らく蕉風の骨髄を示し、變風の絶頂に達したものと言つてよからう。殊に前三卷の歌仙がよく出來てゐる。なほ詳しくは下卷の各卷の鑑賞條下を讀んで貰ひたい。

註書

猿蓑爪じるし

杜勤著。一册。天明七年刊。發句十三、幻住庵記・几右日記の短評、七部集論、其他。

俳諧古集之辯

杜哉著。三册。寛政五年刊。「猿蓑」・「炭俵」、「續猿蓑」中の連句を簡單に說きしもの。

猿蓑逆志抄

東杵庵樨柯著。七册。萬延元年刊。卷初に、「猿蓑」の作者百十五人の略傳を揭げる。解は親初に說かれてゐる。

七部小鏡

何丸口授。公石筆記とある。「大鏡」の附記に、「大鏡成つて後、諸家の談論、市中に

得る所の註書の類に、亘多の說あり。是を七部小鏡と題し、別卷に著す。云々」とあるが、全然「逆志抄」の難書である。一册。弘化四年刊。

俳諧猿蓑註解

桃支庵指直著、其角堂永機校正とある。一册。明治二十年刊。猿蓑の連句解である。附錄に七名・八體を註する。

猿蓑集歌仙異同考

成美著。一册。寫本。

猿蓑集序註解

道舊著。一册。寫本。晉子其角の序を分り易く訂正したもの。

猿蓑註解

錦江著。一册。

猿蓑評釋

志田義秀閲。新田寛著。一册。昭和七年刊。猿蓑註書中の善本である。參考となる說

が多い。

其他諸家の七部集の註本がある。

猿蓑集中に幻住庵ノ記が出てゐる。此註書も參考迄にあげて置かう。

俳諧あしのひともと

護物著。一册。文政十年刊。古來有名な註書であるが、あまり參考にならない。

幻住庵私解

櫻門（さくらかど）著。一册。寫本。辭句の註に詳しい。

幻住庵記 凡右日記 解

雁來著。一册。寫本。文政四年、魯屋老人序。

幻住庵記略註

道舊著。一册。寫本

凡例

一、本書は初學者のために著述したものであるから、註釋は專ら平易・簡明を旨とし、故事・出典の煩瑣な引用を避け、辭句の考證的說明を略した。

一、從つて集中の句文に送假名を施し、讀みにくき語には振假名を附け、誤字と認むべきものは訂正した。

一、本書は解題揭出の註書の外、吏登・蓼太・何丸・曲齋・成美・錦江・西馬等の七部集の註を參酌した。

一、本書は前篇と後篇に分けて註した。前篇は其角の序より卷之四迄、後篇は卷之五以下最後迄を收めた。

昭和十五年二月

蘿月識

晋其角序

俳諧の集つくる事、古今にわたりて、此道のおもて起すべき時なれや。幻術の第一として、その句に魂の入らざれば、夢にゆめ見るに似たるべし。久しく世にとゞまり、長く人に移りて、不變の變をしらしむ。五徳はいふに及ばず。心をこらすべきたしなみなり。彼の西行上人の、骨にて人を作りたてゝ、聲はわれたる笛を吹くやうになん侍ると申されける。人には成りて侍れども、五の聲のわかれざるは、反魂の法のおろそかに侍るにや。されば魂の入りたらば、アイウエオよく響きて、いかならん吟聲も出でぬべし。只俳諧に魂の入りたらむにこそとて、我翁行脚の頃、伊賀越えしける山中にて、猿に小蓑を着せて、俳諧の神を入れたまひければ、たちまち斷腸のおもひを叫びけむ。あだに懼るべき幻術なり。これを元として、此集をつくりたて、猿蓑とは名付け申されける。是が序もその心をとり、魂を合せて、去來・凡兆のほしげなるにまかせて書く。

元祿辛未歳五月下浣　　雲竹書

【語意】 **晋其角序**—錦江の「七部集通旨」に、「芭蕉葉船に、此序晋子が名をかりて、實は翁の稿なりといふ。是古今集の眞名序を、貫之の子に代りて書せしといひし説によりての好事の所爲なるべし。古くよりも又いふ事と見えたり。今文章の體を考ふるに、祖翁の手作にあらざる事明らけし。云々」とある。又西馬の「標注七部集」の頭註に、「元祿ノ製本ニハ年月筆者ノ一行アリ。故ニ首ニ其角序ト書ス。然ルニ一帖ノ畠紙ヲ吝ミ、後年書肆ノ拔去リシモノナリ。序ノミ蕉翁ノ書ト云フハ非ナリ。」とある。**古今にわたりて**—西馬の頭註に、「古ハ宗鑑・守武・貞德・宗因ノ時代ヲサシ、今ハ貞享・元祿ヲ云フ。」とある。**おもて起すべき時**—面目を揚げるやうな時機、或は譽をかがやかすやうな時機。「擧白集」さが衣の中に、「大和うた好ませ給ふ大臣（秀吉の事）にて、春秋の色に深く思ひしみ、折につけたる御口ずさみ、こゝら世にとまりけむ。誠に月花も、おもておこすべきときなれや。云々」とある。**幻術**—幻術とはまやかし手段といふ義であるが、こゝでは言語や表現の力によつて、人の心を奪ひ、人々を驚歎させる術を言つた。其角は芭蕉の俳諧を幻術と考へたのである。**不變の變**—不變は不易、變は流行である。不易と言ひ、流行と言つても、根本に於ては同一精神で、即ち不易であつて流行、流行であつて不易といふ關係にあるからかく言つたのである。**五德**—德元のいふ五つの德である。即ち德元の「俳諧初學抄」に、「誹諧には連歌の德の外に五つまさりたるたのしみ侍るとかや。第一、俗語を用ふる事。第二は、自讃し侍りてもをかしき事。第三、取りあへず興を催す事。第四、初心のともがら學び安くして、和歌の浦波に心をよせ侍る事。第五には、集歌・古事來歷分明ならずとも、一句にさへ興をなし侍らば、何事をもひろく引きよせて付け侍るべき事。是五の德也。」とある。五常であるとか、五事の德であるとかといふ説には從ひがたい。**たしなみ**—好める道といふ義で、芭蕉のいふ風雅の道をさす。**彼の西行上人云々**—「撰集抄」高野參ノ事、付骨ニテ人ヲ造ル事の條下に、西行が廣野で死人の骨を集めて人の形を造り、反魂の法を行つたが魂が入らず、聲は出るけれど、吹き損じた笛のやうで、更に人の聲ではなかつた。後京に出で、伏見中納言師仲を尋ねて、此の話をしたら、それは反魂の法の修行が足りないためであらう。これこれすればほんとに出來ると教へられたといふ故事である。**五つの聲**—アイウエオの五音（イン）。**反魂の法**—密家の秘法で、死者の魂を呼び返す

法である。**吟壁**—俳諧を讀み上げて、その句の可否を吟味する事。**伊賀越えしける山中**—芭蕉が元祿二年奥の細道を終つて、郷里伊賀の上野へ赴く途中、伊賀の山を越えた時の事であらうか。**猿に小蓑を着せて**—初時雨猿も小蓑をほしげなりといふ句を作つてといふ義。**斷腸の思**—肝腸寸斷の義。感動の極を言つたもの。**あだに**—普通ははかないとか徒にとかいふ義であるが、こゝでは實にとか誠にとかと解したい。**ほしげなる**—猿も小蓑をほしげなりのほしげを、欲しさうであるのほしげに掛けた洒落である。**雲竹**—北向氏。もと林氏。名は觀、通稱八郎右衞門。玉蘭堂と號する。加茂の祠官藤木甲斐守敦直の門人。細楷を善くし、高野大師の俤がある。芭蕉が書道の師。元祿十六年歿。行年七十二。

【文意】 俳諧の集を作る事は、その俳諧のほまれが、世上に高くかがやくやうな時機に至つて、出來る事である（暗に猿蓑の出版をほめた。）かくして成つた俳諧は、幻術の最肝心な事として、その句に精神が入らなければ、夢に夢を見るやうなたわいのないものとなるであらう。併し魂の入つた俳諧であるとすれば、その俳諧は永久に世にとどまり、末長く人の口にうたはれて、不易にして流行といふ意味を知らせる事にならう。古人も言つたやうに俳諧には五の德があるのはいふまでもないが、その外にかうした力もあるのだから、眞劍になつて學ばなければならない風雅である。かの西行が骨で人を作つて見たが、出る聲は割れた笛を吹くやうであつたと言はれた事がある。それは人の形にはなつたけれど、五音の區別のつかないのは、反魂の法の修行が足りないからであらうか。若もその人形に魂が入つたならば、五音の調子がよく整つて、どんなうまい歌句でもよまれた事であらう。ただ俳諧に魂の入る事が第一である。そこへ行くと我師芭蕉翁は、伊賀の山を越えて郷里へ歸られる時、山中で猿も小蓑を云々の句を作られて、俳諧の根本精神をお入れになつたから、猿のやうな動物でも深く感じて、斷腸の思を叫んだ事であらう。實に此の入神といふ術は、恐るべき句作手段である。この意味をもととして、此の集を編成し、猿蓑と名づけたのである。私の序文もその心を取り、魂を合せて、去來・凡兆の淸矚を容れて、書いたのである。

元祿辛未歲（四年）五月下浣（一月を上・中・下の三浣に分ち、下浣は月の二十日から三十日迄の間をいふ。）

雲竹書

【鑑賞】 この文は古來名文として傳へられたものであるが、疵が多く、名文とは考へられない。芭蕉の俳諧を幻術に譬へるなど、其角一流の見方であつて、面白くないが、それはしばらく措き、文の構成に就ていふと、文字の使ひ方に無理な所もあるし、文と文の連續も唐突で、その間に若干の語句を入れなければ、意味の解しかねる所もある。殊に前半の「幻術の第一として」より、「心をこらすべきたしなみなり」迄の文の連續に、この非難があるかと思ふ。次に參考として道舊の補文を掲げる。その意味はかく修正すれば、文意が通じ易いといふだけの事で、文の價値から示したのではない。價値から言へば、如何に文疵があつたにせよ、原文とは比較にならない。

道舊補文

俳諧の集作らむも、古今に渡らざればかたし。斯く此一集なれるものから、此道の面おこすべき時なれや。幻術の第一とするは、句毎に魂の入らざれば、夢にゆめ見るに似たるべし。久しく世に傳はり、長く人の言の葉にとゞめて、不變の變をしらしむべし。五德は云に及ばず。貴賤風化の基ともなりなむ。こは心をこらすべきたしなみなり。彼の西行上人の、人の骨もて人を作りたてゝ、聲はわれたる笛を吹くやうになむ侍るとまをされける。人には成て侍れども、五ツの聲の分れざるは、反魂の法のおろそかに侍るにや。さればたましひの入りたらむには、アイウエオ能くひゝきて、いかならん吟聲もいでぬべき。唯俳諧に魂の入らざらむにこそとて、我が翁行脚の頃、伊賀越えしける山中にて、猿に小蓑を着せて、俳諧の神を入給ひければ、たちまち斷腸の思ひを叫びけむとや。誠に懼るべき幻術なりき。これをもとゝして此集をつくられ猿蓑とは號づけられにけり。これが序も、その心をとりて、供に魂を合さむと、去來凡兆のほしげなるにまかせて、しかかきぬ。

冬

初時雨猿も小蓑をほしげなり　芭蕉

【句意】時雨にぬれて侘しく山路を辿つて行くと、行手の木に猿が止まつて居た。あのいたづらな猿も今日はしよんぼりとして、小さい蓑でも欲しさうな風であるといふ意。

【鑑賞】此の句は序にある通り、芭蕉が伊賀の山越え即ち芭蕉が奥羽北陸の旅行を了へ、伊賀へ入つて來た元祿二年冬の句で、所謂五音のひゞきも整ひ、魂も十分入つて居る所から、卷頭に掲げられた譯であらう。從つて昔からやかましく賞められてゐる句で、中には此の句を猿蓑全體の父たるべき句とし、次の其角の句を母とし、此の二句からすべての句

が産れたのであると論じてゐるものさへもあつた。併し此の句は猿も小蓑と言つた芭蕉の主觀に、寂しい眞面目な滑稽味があつて、それで何となく高尚な落着いた趣を具へて居るので、新風樹立の句としては姿情の整つた、去來の好きさうな句であると思ふ。

あれ聞けと時雨來る夜の鐘の聲　其角

【句意】時雨降る夜、鐘の聲が殷々として物凄くひゞき、その聲をしみ〴〵と聞けよとばかりに、時雨がしめやかに降つて來るといふ意。何丸の「大鏡」に、「三井の鐘とはきこえたり。」とある。

【鑑賞】二句父母の論は附會說であるが、其角の艶つぽい趣味は窺はれるのである。其角の句を芭蕉の次に出した事は、其角は去來の親友でもあり、序文も書いて貰つたりした關係からであらう。此の句は瞑想をそゝるやうな句であるが、技巧はうまい。

時雨きや並びかねたるいさゞ舟　千那

【語意】いさゞ—琵琶湖に産する沙魚に似た、大きさ一寸位の魚である。時雨きや—きは過去の助動詞、やは感動詞。時雨たなあとか時雨れたわいといふ意であらう。

【句意】湖上を見渡すと、沖がしぐれて暗くなり、今にも風や浪が起りさうになつたので、いさざを捕つてゐる船が並びかねて、あちこちと動き出した光景である。

【鑑賞】並びかねたるといふ主觀が、湖上の陰慘な趣をよく表して、句意を活躍させてゐる。

幾人か時雨かけぬく勢田の橋　丈草

【語意】勢田の橋—近江の志賀郡と栗太郡との堺の橋で、小橋の長さ二十三間、大橋の長さ九十六間、昔は有名な長い橋で、和歌にも多く詠まれてゐた。

【句意】時雨の降る勢田の橋を遠くから眺めてゐると、後から後からと、多くの人が走つて來るが、橋が長いので、皆時雨にぬれて、思ふやうにぬれずに驅け拔ける人はゐない。その多くの人が途中で、時雨にぬれて、弱つてゐる樣が面白いといふ意。

【鑑賞】幾人か時雨かけぬくと言つた所に、丈草の脫落した氣持が見えてよい。殊に有名な長橋であるから、見てゐる者の興味をそゝる。金葉集に「幾人か比叡山おろししのぎ來て時雨にむかふ瀨田の長橋」といふ歌があるが、或は之から思ひ付いてから詠んだのかも知れない。

鎗持のなほふり立つるしぐれかな　膳所　正秀

【句意】大名行列が途中時雨に逢つた光景であらう。鎌髭奴が大鳥毛の鎗を一層景氣よく振立てゝ、靜かに錬り行く狀が想像されよう。

【鑑賞】猶の一字が生命である。猶振立つるで、行列が一層靜かに繰り出されたやうに感ぜられる。巧みな句である。

廣澤やひとりしぐるゝ沼太郎　史邦

【語意】廣澤—京都府下葛野郡嵯峨村にある小沼である。周圍一町餘、月の名所である。沼太郎—エドヒシグヒの一種。鷺といふ說もある。

【句意】廣澤の沼にヒシグヒが時雨にぬれて、佗びしくそんでゐる事である。

【鑑賞】廣澤の沼の實境を知らなければ、時雨のヒシグヒの寂しさも想像がつかないけれど、寂しく荒れた所の氣分はよく表れて居ると思ふ。沼太郎と言つた所に、俳諧的な心持も見える。沼太郎は沼の廣大を形容したので、鳥ではないといふ說もあるが、さうすると廣澤が變になるかと思ふ。やはりこゝは鳥と見た方がよからう。

舟人にぬかれて乘りし時雨かな　尙白

【句意】 尙白は大津の人であるから、矢橋の渡にかゝつたのであらう。矢橋の渡は勢田の北一里にあつて、大津松本へ湖上一里の間である。大津から草津へ行くに、陸路勢田を廻つて行く道もあるが、矢橋の渡で行けば、一里も近いので、よく渡つたものである。併し此の渡は空模樣を見て通らぬと、折々危險に逢ふので、陸を遠廻して行く者も亦多かつた。「もののふの矢橋の渡近くとも急がば廻れ勢田の長橋」といふ古歌もあつた。句意は草津へ行くに、船頭は時雨は大丈夫だから船に乘れと言ふので、だまされて乘つて時雨に逢ひ、ひどい目に逢つたと言ふのである。

【鑑賞】 時間を含んだ、複雜な人事の句のやうである。去來の句にも「心なき代官殿や時鳥」といふ句があるから、此の句の入選も怪しむに足らないかも知らぬ。自然の素朴な景情を好む元祿俳人の句としては、ちと珍らしい氣持がしないでもない。

伊賀の境に入りて

なつかしや奈良の隣の一時雨　　曾良

【語意】 奈良の隣—曾良は芭蕉に連立つて、奥羽旅行に赴いた人で、芭蕉が加賀の山中溫泉に着いた時、腹を病んで一人先に伊勢の長島の知人を指して、芭蕉と別れたのである。前書に伊賀の境とあるのは、伊勢の國へ漸く近付いて來た事である。伊賀は大和の隣國である。大和は昔、奈良の都のあつた所だから、伊賀を奈良の隣と言つたのである。奈良は元明天皇から桓武天皇延曆十三年まで七代七十餘年の帝都で、文學美術の盛んであつた時代だつた。

【句意】 伊賀は昔文運の盛んであつた奈良の京の隣國である。自分はこゝで時雨に逢ふと、懷古的の情がしみ〴〵起つて、此の時雨がなつかしい氣がしてならないといふのである。

【鑑賞】 なつかしやが時雨によく利いてゐる。時雨といふ靜寂な景物が、舊都の思出によ

く釣合つてゐる。何となくしみ〴〵させる句で好もしい。西馬の「標注七部集」に、伊勢の境に入りてと前書する。

しぐるゝや黒木つむ家の窓あかり　凡兆

【語意】黒木—木を一尺位に切つて、黒くえぶした薪で、八瀬・大原あたりの女が京へ賣りに來る。

【句意】黒木を家の軒下に高く積んだので、上の方に開いてる窓からわづかに光線が室内へ入るだけで、殊に時雨の降る日などはうす暗くて陰氣臭いといふ意。京都の家は大方棟が低く、格子造りで、ふだんの日だつて陰氣な感がする。

【鑑賞】純客觀の句で、印象はよく捉へられてゐる。

馬借りて竹田の里や行くしぐれ　大津　乙州

【語意】竹田の里—山城國紀伊郡深草の西にある小村である。

【句意】旅行吟か。馬を借りて、竹田の里を時雨に降られながら通つたといふ意。

【鑑賞】人麻呂の「山城の强田(コハダ)の山に馬はあれどかちよりぞ來し汝を思ひかねて」といふ歌から、此の句が出來てゐるやうに說く人もあるけれど、私は必ずしもさう解釋しなくともよいかと思ふ。作者には木幡の里の連想はあつたとしても、此の句は旅中の實況を示したもので、人麻呂の歌に關係なく出來たものと見たい。馬を借りたと言つただけで、時雨に逢つた竹田の里の田舍道の侘しい光景はよく表はれて居る。

だまされし星の光や小夜時雨　羽紅

【句意】宵の内は星がきらめいて、降りさうもなかつたが、夜が更けて來ると時雨が降つて來た。いぢの惡い空であるといふのである。

【鑑賞】女のやさしい心持が素直に出てゐる。

新田に稗殼けぶる時雨かな　膳所　昌房

【語意】稗殼―稗を取つたあとの殼である。稗とは粟のやうな穗で、黍のやうな實のなるもの。秋とり入れるのである。

【句意】新しく墾いた田の中で、稗殼を燒いた。殼がぶす〳〵えぶつて、時雨の中であるから、煙も上らず、地を匍ふやうに、白い煙が佗しく立つといふ光景である。

【鑑賞】新田だから面白いのである。新田だから稗をもやしたのである。

いそがしや沖の時雨の眞帆片帆　去來

【句意】港に泊つて居た船が、時雨の爲に、或は帆を一面にあげ、或は半分あげて、忙しく動き出した光景である。空模樣の險惡を氣遣つて、それ〴〵避難の準備に取掛つた所であらう。

【鑑賞】「去來抄」によると、去來曰、これは失敗した句である。「有明や片帆にうけて一時雨」としたらば、句のはしりもよく、心のねばりも無くてよかつた。芭蕉云、沖の時雨も面白くない事もないが、句は有明やの方よりずつと劣ると。成程有明やの方は、有明やと置いた所が、朝の時雨の情趣を深めて居よう。併し雨句の優劣は五十歩百歩のやうな感もする。

初霜に行くや北斗の星の前　伊賀　百歲

【句意】初霜を踏み、北斗星をいただいて出發する事であらう。一說に、初霜の下りる凛乎とした氣が、北斗星の前まで行くといふが、さうではあるまい。又、初霜を踏んで出發する人の元氣が、北斗星の所まで行渡るといふ事でもあるまい。又、北斗星は人君の象也

と言ふ所から、君前に伺候する事を形容したのであるといふが、之も無理な解であらう。成美の説に、朗詠集劉元寂の詩に、北斗星前横二旅雁一とあるが、或はそれから思ひ付いたのではなからうか。旅宿を朝早く立出でたやうにも思はれる。

一色も動くものなき霜夜かな　野水

【語意】説明を要しない。

【句意】霜夜の冴え渡つた光景で、天地たゞ陰々として靜まり返つて居る事。

【鑑賞】平凡にして幼稚。

淀にて

初霜に何とおよるぞ船の中　其角

【語意】何とおよるぞ—狂言靫猿(クツボザル)に「船の中には何とおよるぞ、笘をしき寐の梶枕。」とある言葉を取つたのである。元祿元年冬の吟か。淀にて—淀川の三十石船の霜夜の事。

【句意】船の中の人は、この霜の朝をどんな氣持で寐て居るだらうかといふのである。淀川を上下する客船を見ての事か。

歸花それにもしかん莚切　其角

【語意】歸花—十月の小春日和に、櫻や桃の時をあやまつて咲く事をいふ。

【句意】櫻の花が歸り咲きしたので、莚の切れでも敷いて、花見しようといふ意。

【鑑賞】意味のよく分らぬ句である。其角の奇拔な、一人よがりの傾向の見える句である。或は木が若返つて咲くやうになつたから、貧乏な自分の敷いて居る莚の切れでも出して、それに敷いてやらうかといふ、物に構はぬしやれを言つたものか。空然の説に、木に

は今かへり花の咲いて居るのに、自分は木にも劣つてゐる身の上である。自分はいつその事、莚切れでも敷いて名利を思切らうといふのであるといふが、之は原本にしかんを敷んと書いて居るから信じられない。

禪寺の松の落葉や神無月　凡兆

【句意】たゞでさへ寂しい禪寺の、十一月の冬枯れた庭に、松の落葉が散りこぼれてゐる光景。

【鑑賞】芭蕉の金屏の冬ごもりの句と同じく、質素などつしりした句で、いかにも禪寺の佗しいありさまを想はせる。

百舌鳥の居る野中の杭よ十月　嵐蘭

【句意】十月の霜枯れた野中の木の切株に、百舌鳥が止つて寂しく啼いて居る光景である。

【鑑賞】杭よとは、あたりの寂しい光景の中心となつて居る杭であるから、特に注意を集めるやうな言ひ方をしたのであらう。ひろ〳〵とした野中、外に目に付くものはないが、たゞ木の切株に百舌鳥の止つて居るものだけが、特に寂しく感ぜられるといふよである。和歌に「鵙の居る古枝の萩も霜かれてあしたの原に秋ぞくれゆく（「夫木集」衣笠右大臣）」或は「尋ね來し人こそ見えね百舌鳥の居るまさき色付く外山邊の里」（擧白集）などとあるけれど、此の句はかゝる歌に關係なく、實況を示したものと見だい。

木枯や頬腫れいたむ人の顔　芭蕉

【句意】俗にいふお多福風を病んで頬をはらして居る人が、木枯に吹かれて佗しく通る狀である。

【鑑賞】頬が腫れ痛むのではなく、頬腫いたむと讀むべきである。憂はしい顔に白い粉を

吹かせて居る樣子まで想像されて、木枯のすさまじい氣分に何となくうつるやうに思はれる。

砂よけや蜑のかたへの多木立　凡兆

【語意】砂よけ—海の方から砂を吹付けてくるので、多木立の間に莚を張つて、砂が入つて來ないやうにする。

【句意】漁師の家の實景。

【鑑賞】寫生の新しみのある句。

奈良にて

棹鹿のかさなり臥せる枯野かな　伊賀土芳

【句意】冬枯の野に鹿が重つて臥て居る光景である。

【鑑賞】萬葉集に左牡鹿、左小鹿、棹牡鹿などとある。棹鹿は牡鹿の事で、奈良は鹿の名所である。かさなり臥せると言つた所に、冬枯の野の寂しい荒れた狀はよく出て居る。

澁柿をながめて通る十夜かな　膳所　裾道

【語意】十夜—淨土宗の會式で、京都黑谷の眞如堂から始まる。善行を修すること十日十夜なれば、他方諸佛の國土に善をなす千歲にも勝れりとある經典から出た言葉である。十月六日から十五日まで行ふ。

【句意】十夜へ行く善男善女が、澁柿のなつて居るのを眺めて通るといふだけである。

【鑑賞】柿は十夜の節物で、毎年十夜法事の間、眞如堂の門前で柿を賣つたり、或は市中で賣つたりしてゐる。此の句は十夜講の人と澁柿の取り合せで、何となく感じがよく合ふ

と思ふ。法然上人と柿の逸話を考へて、此の句を作つた譯でもあるまい。

茶の花やほるゝ人なき靈聖女　越人

【語意】 靈聖女―靈照女の誤。靈照女は龐居士の女である。龐居士入滅しようと思つて、靈照女に向ひ、日ざしを視て、午になつたら知らしてくれと言つた。靈照女遽に報じて、もう午になつたが、日蝕であると言つたので、龐居士戸を出て、日ざしを視る中に、靈照女父の座に登り、合掌して死んで了つた。居士笑つて娘はなか〳〵賢い奴ぢやと、七日過ぎて自分も死んだとある。

【句意】 茶の花やとは靈照女父子の草庵の景で、ほるゝ人なきとは靈照女を俳諧的に冷笑した事であらう。即ち靈照女が、女の身で、禪に凝つて、くすぶつて居ては、惚れる人もあるまいと言ふのである。

【鑑賞】 何丸の説に、嫁のみやげは茶と苧である。靈照女は烈女だから、誰も娶らうといふ人はない。一度も嫁入りしないのは花である。一度嫁入りするのは實である。それだから茶の花やで、意味は分らうとあるが、附會も甚だしい説と思ふ。茶の花やは作者の想像で、茶の木はよく寺にあるものだから、靈照女の草庵の全景として、茶の花やと寂しみを表はしたのであらう。

みの虫の茶の花ゆゑに折られける　伊賀　猿雖

【語意】 みの虫―蛾の幼虫。初夏の頃、古い葉の裏を卷いて糸を吐き、その中に巣籠つて若葉を食ふ赤黒い虫である。昔からチ、と鳴くものゝやうに言はれて居るが、實際は鳴かない。どういふ譯で元祿俳人はこんな虫を好んだか、芭蕉も好んでゐるし、素堂に義虫ノ説さへあつて、此の虫の音に興味を感じてゐる。

【句意】 みの虫も茶の木なんぞに巣を食はなければ、茶の花のために折られて、巣をこはされもしないが、似た趣味の茶の木なぞに巣食つたばかりに、ひどい目に逢はされるの

は、氣の毒だといふのである。茶の花も俳人の好いたものだから、みの虫とかけ合したのであらう。

【鑑賞】何丸の說に、梅は鶯のためにめでたいが、みの虫は茶の花のために折られたのだといふ反對の心持があるといふがどうだらうか。私はたゞみの虫に同情して、茶の花は同じ趣味のものとして、寂しい色を添へるために、持つて來たのだらうと思ふ。併し意味ありげな句である。

古寺の簀子も青し冬がまへ　凡兆

【語意】冬構—防寒の用意をする事で、地方によつてそれ〴〵仕事も違ふだらうが、霜除をしたり、薪をこしらへたり、家屋のこはれを直したり、垣のしまりを結ひかへたり、風除を拵へたり、雪除をしたり、芋や大根を土中に圍んだり、いろ〳〵あらう。こゝでは簀子を新しくしたのである。簀子—竹で拵らへた椽側である。

【句意】古寺の冬がまへに、外まはりや家の中のこはれを直し、簀子も青々と作りかへたのが、特に目に付くといふ意。

【鑑賞】簀子も青しと言つた所が、寺の冬がまへの焦點を捕へて居て、なか〳〵面白い。

翁の堅田に閑居を聞きて

雜炊の名所ならば冬ごもり　其角

【語意】堅田—近江の堅田は雜魚雜炊の名所である。雜炊とは野菜を入れた粥の事で、それに雜魚が入るので、雜魚雜炊と言はれた。

【句意】雜炊の名所であるなら、自分も芭蕉翁と共に冬ごもりして、雜炊を食べたいものである。

【鑑賞】五元集に「幻住庵より」と前書がある。雜炊の名所とは少し大袈裟に聞えるが、

堅田の人は雜魚雜炊を賞美したからであらう。

此の寒さ牡丹の花の眞裸　伊賀車來

【句意】寒牡丹の花が大きく勢よく咲いてゐる事を言つたのである。

【鑑賞】放膽的に一氣呵成に言ひ下した所が面白いのであらう。幼稚な感もする。

草津

晦日も過行く姥がゐのこかな　尙白

【語意】ゐのこ―亥の子祭の事で、十月初の亥の日に餅をついて祝ふ事である。猪は子を多く産むから、それにあやからんため祝ふのであるとも言はれ、或は初亥の亥の刻に餅を食べると、病氣にかゝらないからだとも傳へられてゐる。

【句意】姥は子を祈る考もないから、亥子祝もしないで、うか〳〵と晦日を過して了ふといふ意。

【鑑賞】前書に草津とあり、句に姥がゐのことあるは、草津の姥が餅を連想して、姥のゐのこと言つたものであらう。傳說によると、昔近江の六角左京大夫義賢といふ領主が、信長のために亡され、その子孫寬永の頃まで代官のやうな仕事をして居た所、或罪によつて誅せられた。その時一人の乳母が三歲になる主人の子を養育するために、餅を製し往來に持出して、大名高家の乘物にすがり、事情を訴へて憐みを乞ふたので、人多くその眞實に感じて之を買ひ、だん〳〵後に繁昌して小店を開くやうになつた。之が乳母が餅の由來であると言はれる。

神迎水口たちか馬の鈴　珍碩

【語意】 神迎―十月一日は諸神出雲へ集るから、神送と言つて祭るが、十月三十日は出雲からめい〳〵の社へ歸つてくるので、之を神迎と言つて出迎ふ行事がある。水口たち―近江甲賀郡にある。水口驛出立の義。

【句意】 朝まだ人の起きない中から、往來が大變やかましいので、何だらうと考へてゐると、今日は神迎の日である事を知つて、あの馬の鈴の音はきつと水口を立つ神迎連中の騷ぎであらうといふのである。

【鑑賞】 旅泊の體であらう。保考の說に、水口驛に養源寺といふ寺があつて、その僧霜月一日神迎に逢坂の關まで出るとある。何丸「土山にての吟なる事必定也」は疑はしい。

霜月朔旦

膳まはり外にものなし赤柏　伊賀　良品

【語意】 赤柏―十一月一日には、冬至でなくとも、あからかしはと言つて、小豆飯を用ふる。

【句意】 霜枯の膳まはり、魚肉も野菜もなく、たゞ汁や香の物に、赤の御飯だけであるといふ意。

【鑑賞】 吏登の說に、赤柏は七柏の一つで、夏は青柏、冬は赤柏を用ひ、十一月一日北野の天神へ供御を奉る時に用ふるものであるとあるが、それは此の句に關係のない說明であらう。こゝの赤柏はやはり成美や何丸の說に從つた方がよからうと思ふ。

水無月の水を種にや水仙花　出羽酒田　不玉

【句意】 六月土用中に、水仙の根を洗ひ〳〵して植ゑると、花が格別に早いといふ事から、水仙の美しく咲くのは、六月の淸い水を種にして咲くのであらうといふ意。

【鑑賞】 想は奇拔だらうが、つまらぬ洒落である。

今は世をたのむけしきや冬の蜂　尾張　且藁

【句意】蜂も炎暑の候には威を逞うして居たけれど、今はもう世の中をたのむやうに、へこたれて了つたといふのである。

【鑑賞】冬の蜂のあはれな狀態を詠んだのだけれど、かゝる想像は平凡である。たゞ質朴な心持だけが取柄だらう。

尾頭のこゝろもとなき海鼠哉　去來

【句意】海鼠はどつちが尾だか頭だか、譯の分らぬ不氣味なものであるといふ意。

【鑑賞】上品な滑稽味のある句だが、中七の主觀がぼんやりして生ぬるい氣がする。何丸の海鼠をみゝずに改めた作は感心しない。あれでは原句に劣る事數段である。

一夜〳〵寒き姿や釣干菜　伊賀　探丸

【句意】軒端に釣してある大根の葉の干した物が、一夜〳〵赤く寒さうに枯れて行くといふ意。

【鑑賞】一夜〳〵と時間を含んだ表現が面白い。

道端に多賀の鳥居の寒さかな　尙白

【語意】多賀神社―近江の犬上郡にある。古書に多何又は田鹿に作る。伊弉諾尊を祀つた社であるといふ。本殿より三十一町もへだてた高宮驛の通り端に、大きな石の鳥居が立つてゐる。

【句意】道端に多賀神社の鳥居が寒むさうに立つて居るといふだけ。

【鑑賞】 昔日の實景を知らぬ者には、寒い感じが更に浮んで來ない。保孝の說に、一の鳥居は道端に高くありとある。又、西馬の說に、鳥居は高宮驛にありと。

茶の湯とてつめたき日にも稽古哉　　江戸　龜翁

【句意】 茶の湯は儀式ばつたもので、寒い冷たい日にも、稽古するかと思ふと、靜寂の氣分が一層强く感ぜられるといふのであらう。

【鑑賞】 茶の湯とてと言つた重々しい直叙的な表現が、冬の茶の湯稽古の餘情を强くひゞかせて居るやうである。全體の思想はたいして面白くもないが、餘韻あるやうな表し方が取柄であらう。

炭竈に手負の猪の倒れけり　　九兆

【句意】 炭燒竈の中に手負猪が倒れたといふ意。

【鑑賞】 手負猪の猛きすさまじい狀態を表はさんがために、炭燒小屋を持つて來て、感じを取合せたのである。

住みつかぬ旅の心や置ごたつ　　芭蕉

【語意】 置火燵―木でやぐらを組んで、持ち運び出來るやうな火燵。

【句意】 火燵を置いてすつぽり暖つてゐても、自分の境遇を考へると、そはそはして住みつかない不安定な氣がしてならないといふ意。

【鑑賞】 元祿四年の吟か。「夫木集」に、「うかれめのうかれて歩く旅やかた住みつきがたきものにぞありける」（季經）とある歌詞を取つたといふ說もあるがどうか。芭蕉の生活のほんとな述懷が、しみ〴〵と迸出する力を持つた句である。路通の「勸進牒」に、「いね〳〵と人に言はれても、なほ食ひあらす旅のやどり、どこやら寒き居心を佗びて」とし

た曲水苑の手紙が出て、此の句がある。

寢こゝろや火燵蒲團のさめぬ内　其角

【句意】火燵蒲團のさめない内が、一番寢心のよい時であるといふ意。

【鑑賞】其角が若い時、嵐雪と同宿して、どらをつくして居た事があつた。破笠もやつて來て、寒い晩などは三人で、一つ火燵に入つて、寢たものである。そんな事を思ふと、此の句の氣持も其角には捨てられないものであらう。

門前の小家も遊ぶ冬至かな　九兆

【語意】冬至—陽曆十二月二十二日、晝最も短く、夜最も長い一陽來復の時。此の日は仕事を休み、奴婢をいたはる事が例である。冬至が十一月朔旦にあたると、非常にめでたく

朝廷では重い祝賀を行つたといふ。

【句意】冬の寺は寂しいものであるが、冬至なので、殊の外森として、門前の花や線香を賣る小家までも、ひまであるといふのである。

【鑑賞】門前の小家とは巧な見付所である。門前の花賣などは乏しい暮しをしてゐるもので、それさへ仕事を休むといふのだから、冬至の寺の如何に物靜かであるかゞうかゞはれる。

木兎やおもひ切つたる晝の面　尾張　芥境

【句意】晝間見た木兎の面は、思切つた奇拔な面をして居るといふ意。滑稽な句である。

みゝづくは眠る所をさゝれけり　伊賀　半殘

【句意】木兎が晝間高い木の上に眠つてゐる所を、捕られたといふ意。木兎は晝は眼が見えないからである。

【鑑賞】前句より曲節があつてよい。滑稽でもあるし、あはれでもある。

貧交

まじはりは紙衣の切を讓りけり　丈艸

【語意】貧交—杜甫の貧交行に、「翻レ手作レ雲覆レ手雨。紛紛輕薄何須レ數。君不レ見管鮑貧時交。此道今人棄如レ土」とある。紙衣（カミコ）—澁をしいた紙を柔にもんで作つた衣服。

【句意】我々の交際は、紙衣の切端も讓り合ふ位、情誼の厚いものであるといふ意。

【鑑賞】貧交行の句の佗びた俳諧化であるが、元祿俳人の佗びた實生活はよく出てゐる。

浦風や巴をくづすむら鵆　曾良

【句意】浦風につれて、多くの千鳥が、パッと飛去る光景である。千鳥が群がつて、足跡が巴の形をして居るから、巴をくづすと言つたのである。

あら磯やはしり馴れたる友千鳥　去來

【句意】岩礁の多い磯邊を、多くの千鳥が、巧に波をぬけて、とび歩く光景である。

【鑑賞】千鳥といふと纖細な感のする鳥である所へ、走りなれたるといふので一層細い感じが表れて居る。それに荒磯の取合が、尙更千鳥の實際の動作を活かして居て面白い。

狼のあと踏消すや濱ちどり　史邦

【句意】夜になると、狼が獲物をあさりに出る濱邊に、曉方千鳥が群れて、狼の足跡を踏

み消して了ふといふ意。

【鑑賞】寫實的な新しみのある句であるが、狼と言つた所が多少印象を強める爲に、工夫を凝らした嫌ひがありはせぬかと思ふ。

背門口の入江にのぼる千鳥かな　丈艸

【句意】漁家に泊つての吟であらう。裏の方がすぐ入江に續いて、千鳥が朝になるとひよこ〳〵やつてくる狀である。

いつ迄か雪にまぶれて鳴く千鳥　千那

【句意】いつまで雪をかぶつて、千鳥の鳴く事だらうといふ意。

矢田の野や浦のなぐれに鳴く千鳥　九兆

【語意】矢田の野―越前敦賀の浦つゞきにある。なぐれ―横にそれる。

【句意】浦に鳴く千鳥が、浦を横にそれて、矢田の野まで來て鳴いて居るといふ意。

【鑑賞】「新古今集」に、「矢田の野に淺茅色づくあらち山峯の沫雪寒くぞあるらし」（人麿）とあつて、昔から歌枕になつて居た。千鳥も歌にはよく詠まれる鳥である。そこで矢田の野といふ名所に、千鳥をかけ合せて、古典的な趣味を匂はせたのであらう。

筏士の見かへる跡や鴛の中　木節

【句意】鴛鴦の浮んで居る中に、船頭が筏を押して來て、見返り〳〵行く狀である。

水底を見て來た顔の小鴨哉　丈艸

【句意】小鴨の水をくゞつて來た狀を、水底を見て來たやうな顏して居ると、輕くおどけたのである。

【鑑賞】洒脫な想像で面白い。而も小鴨の可憐な情味も連想される。

鳥共も寢入つて居るか余吾の湖　路通

【語意】余吾の湖―近江伊香保郡にある湖で、琵琶湖の北にあたる。

【句意】同門から見捨てられた路通が、餘吾ノ湖のほとりを通つて、水鳥の羽ばたき一つ聞えない靜かな夕暮の湖面を眺めながら、追懷に耽つた吟であらう。水鳥ももう寢て了つたか、この寒い日暮に自分は今宵の宿も探しかねて、このほとりをさまよつてゐる。水鳥が羨しいやうな氣がするといふ意。

【鑑賞】芭蕉が「此句細味あり。」と評した句で有名である。ほそみといふ事は感覺の鋭いといふ意味に解したいが、こんな間の抜けた表現ではどうかと思ふ。俗調である。たゞ路通の放浪的な境涯から見て、多少同情される句である。

死ぬるまで操なるらん鷹のかほ　且藁

【句意】鷹は死すとも穗をつまずといふ諺を本にして、鷹の顏の死ぬまで操高い樣に見えるといふ意。平凡な句である。

襟卷に首引入れて冬の月　杉風

【句意】襟卷の中に首を引込めて、冬の月を見て居る事である。

【鑑賞】五明の評に、杉風は淺くして淡しとあるのは、かゝる句風をさしたものだらう。

この木戸や鎖のさゝれて冬の月　其角

【句意】 落人であらう。主從繼に打ちなされ、やうやく味方の城まで辿りついた所、城門はかたく閉されて居る。寒月は物凄く光つて居る。主從は味方の變心に力を落すといふやうな光景であらう。

【鑑賞】 「去來抄」によると、東武の其角此の句を書送り、冬の月霜の月置き惱んで居ると言つてよこしたが、芭蕉は冬霜に煩ふべき句ではないと、冬の月にきめて入れたのである。しかるに猿蓑出版後、大津から芭蕉の手紙が來て、柴の戸と集にあるが、此木戸である。かゝる秀逸は一句も大切である。たとへ出版後と言つても、急いで改めるがよいといふ。併し凡兆は柴戸でも此木戸でもさして優劣はないと言ひ、去來は柴の戸にすると感情は普通であるが、此木戸にすると城門の物凄さが非常であると言つて、とう〳〵此木戸に改めた。護物の說に、平家物語月見の事の條下に「惣門はかぎのさゝれて候ぞ。云々」とあるとあるが、之はたゞ言葉を取つただけで、いくらか古典的の匂は附けたものゝ、句意は必ずしも德大寺左大將の舊都の月見を言つたものと考へなくともよからう。

からじりの蒲團ばかりや冬の旅　長崎暮年

【語意】 輕尻馬—本馬（三十六貫目の荷物を積んで行く馬）の半分卽ち十八貫目の荷物しかつめぬ馬をいふ。

【句意】 冬の旅の暮寒き頃、からじり馬によごれた蒲團を敷いたものばかりに逢ふ佗しい光景である。

見やるさへ旅人さむし石部山　大津尼智月

【語意】 石部山—近江甲賀郡石部驛の附近にある。古は磯部山と稱した。

【句意】 石部山が禿げて白く見えるかなたを、旅人が見るから寒むさうに通つて行く光景

である。

【鑑賞】「卯辰集」に、路通の行脚を送りてと前書がある。智月親子は路通の同情者で、多枯の淋しい山の麓を、とぼ〳〵と歩いて行く路通の後姿を見ては、涙なしに見送れなかつたであらう。

翁行脚のふるき衾をあたへらる。

記あり。略之。

首出してはつ雪見ばや此衾　美濃　竹戸

【語意】ふるき衾―元祿二年夏、芭蕉が奥羽旅行の際、出羽の最上川のほとり大石田といふ所の或俳人から、紙衾を貰つた事があつた。それを芭蕉は越路から美濃の大垣へ來て、竹戸といふ人にくれたのである。前書は芭蕉の紙衾記を指したので、そのいはれは其の文を見ればよく分る。紙衾とは紙でこしらへた夜具。輕くて暖い。竹戸は如行門で貧しかつた。

【句意】芭蕉翁から貰つた此の紙衾の中から首を出して、初雪を見たいものであるといふ意。

題二竹戸之衾一

たゝみ目は我が手のあとぞ紙衾　曾良

【句意】紙衾のたゝみ目は俺の手のあとであるぞ。おれも此の紙衾とは長い月日苦勞を共にしたのであるから、粗末にしないで貰ひたいといふ意。

【鑑賞】曾良は芭蕉と奥羽旅行を共にした人である。芭蕉が大垣へ着いた時、曾良も出迎へて居るから、竹戸に紙衾をやる際、曾良も紙衾の別を惜しんで、此の句を詠んだもので

ある。かゝる來歴を知らなければ平凡な句である。

魚のかげ鵜のやるせなき氷哉　探丸

【句意】水邊に鵜が、氷の上から水中の魚の影を見て、捕りたくて眼を配る狀である。いぢらしい感じは出てゐる。

しづかさを數珠もおもはず網代守　丈艸

【語意】網代守—川の早瀨に、杭を上廣く下狹く左右に並べ打つて、その下の川床に簀を置き、川水の杭の中へせかれ入るにつれて、床の簀の上へよつて來る氷魚を捕る人をいふのである。宇治川の氷魚を捕る事を宇治のあじろなどと言つて昔から有名である。

【句意】かゞりを燒いて寒夜にあじろの魚を捕つて居る寂寞な境に身を置きながら、佛道も思はず、殺生を事として居るのは何たる事であらうといふ意。數珠とは百八の煩惱に象り、その數珠の百八あるを上とし、互にもみ合せて、百八の煩惱を無くすといふ意味から來たものである。

【鑑賞】丈草は僧であるから、網代守の境涯を思ひやつて、佛も念ぜず、罪ばかり作つて居ると感じたのだけれど、さすがに數珠も思はずといふ具體化によつて、陳い理窟に陷り易い傾向の句を救つて居る。

御白砂に候す

膝つきにかしこまり居る霰かな　史邦

【語意】白砂—玄關先の砂を敷いた所。史邦は仙洞御所に仕へてゐたから、その御所の玄關先であらう。膝突—三尺四方のうすべりをいふ。

【句意】 膝突にかしこまつて居ると、霰がバラ〳〵降つて來たといふ意。

【鑑賞】 嚴肅な感のする句で、お白砂と言つた所が、一層霰の降る寒さを强めてゐる。

櫻欄の葉の霰に狂ふあらし哉　野童

【句意】 しゆろの葉が、霰交りの風に吹かれて、バサ〳〵いふすさまじさを表した。

鵲の橋よりこぼす霰かな　伊賀示蜂

【語意】 鵲の橋―七月七日の夜、鵲が翅を並べて天の川の橋となり、二星を渡すといふ傳說。

【句意】 こゝでは雲のかけ橋位の意味で、たゞ暗い空から霰の降つてくる事を、古典的に鵲の橋よりこぼすと言つたのであらう。

【鑑賞】 西馬曰く、家持が「鵲のわたせる橋に置く霜の白きを見れば夜ぞふけにける」の換骨だらうと。或はさうかも知れぬ。三駱の說に、鵲の橋とは夜の暗さをいふのである。かさゝぎの羽の色に似た暗さであるとあるが、鵲の羽の色とまではどうだらうか。たゞ家持の歌の言葉を取つて、霜を霰とし、暗い雲の上から降つて來たといふ事の技巧と考へたい。

呼びかへす鮒賣見えぬあられかな　九兆

【句意】 門に出て鮒賣を呼びかへしたけれど、もう何處へ行つたものやら分らず、たゞ霰のすさまじく軒を打つ音ばかりであるといふ意。

【鑑賞】 巧みな句である。呼かへすと言つた所が、時間を含んで、呼びかへす人の動作まで細かく表してゐる。複雜した句である。

みぞれ降る音や朝飯の出來る迄　膳所　畫、好

【句意】朝飯の出來るまで、火鉢にあたつてちゞこまつて居ると、みぞれがバラ〳〵と軒を打つたといふのである。

【鑑賞】朝飯の出來る迄が面白い。寒い朝の實感はよく出てゐる。

初雪や内に居さうな人は誰　其角

【句意】初雪が降つて來た、内に居さうな人は誰だらうか、ひとつ行つて誘ひ出してやらうといふ意。其角らしい艶つぽさを持つた句。五元集に、「立徘徊」と前書がある。

初雪に鷹部屋覗く朝朗　史邦

【句意】初雪の朝、からつと晴れたので、鷹部屋を覗いたといふ意。

【鑑賞】作者は御所に仕へた人であるから、御所の鷹御屋であらうか。初雪と鷹の取合で、勇み立つ鷹の精悍な擧動と、初雪の清い寒さの感じとよく調和する。鷹部屋め見廻りだらう。

霜やけの手を吹いてやる雪まろげ　羽紅

【句意】子供と共に雪だるまを拵へる狀であらう。霜やけだらけの手をかじかめて、子供が雪をまるげて居るその手を吹いて、あたゝめてやる事である。

【鑑賞】女の柔かいやさしい心持はよく出て居る。作者には女の子があつた。

わぎも子が爪紅粉のこす雪まろげ　探丸

【語意】爪紅粉—爪の根にべにをさすこと。

【句意】妻が大勢の侍女と雪だるまを拵へてゐる狀を見ての吟であらう。爪紅粉を雪の上に鮮かに殘したといふ印象がなまめかしい。

下京や雪つむ上の夜の雨　九兆

【句意】雪が雨になつて、音なく降りそゝいでゐる。家人は眠つてゐるのか、物音一つしない。往來もひつそりして、深々と更け行く夜の音が聞える。そこは下京であつた。

【鑑賞】芭蕉が上五文字を自信を以て置いたと言はれる有名な句である。即ち「去來抄」に「此句初に冠なく、先師をはじめいろ〳〵と置き侍りて、此冠に極め給ふ。九兆あと答へて、いまだ落着かず。先師曰、兆、汝手柄に此冠を置くべし。若し勝るものあらば、我二たび俳諧をいふべからずとなり。去來曰此五文字のよきことは、誰々も知り侍れど、是外にあるまじとは、いかで知り侍らん。此事他門の人聞き侍らば、腹いたくいくつも冠置くべし。そのよしと置かるゝものは、又こなたにはをかしかりなんと思ひ侍る也。」とある。要するに下京が中心で、古來芭蕉が情を費して案じ出した冠だとも言はれてゐる。下京といふ町は離宮の後の方で、一體に靜かな場所のやうに思はれる。商店はあつても、商賣が旺んのやうでもなく、店の格子作りが何となく陰氣な感を伴はせる。勤人向きの場所ださうだ。今でもこんな風だから、昔はもつと寂しい所だつたらう。雪つむ上の夜の雨といふ光景が、何となくその場所の靜かさ、佗しさを告げてゐるやうである。かかる光景が下京といふ場所に最適當であつたから、芭蕉は下京やと地位を定めたのであらう。大まかな表現の、餘韻・餘情を味はせる句で、恐らく撰者九兆は感心しなかつた冠であつたらう。古典的な情趣は窺はれるが、印象は不明瞭である。

ながゝと川一筋や雪の原　同

【句意】見渡すかぎり一面の雪の原である。遠く地平線の限る所に、細い野川が一筋長々

と流れてゐる。藍色に澄んだ川、繪のやうな光景である。

【鑑賞】 平淡な叙景であるが佳句。初學者はかかる句より俳句を學ぶべきである。

信濃路を過るに

雪ちるや穂屋の薄の刈殘し　芭蕉

【語意】 穂屋の薄―信濃御射山祭は七月二十七日で、芒で神殿を作り、民家も芒の穂で葺く。之を穂屋といふのである。傳説によると、昔祭神建御名方命が獵に出られた時、御射山（諏訪神社の東南三里）で芒の穂で葺いた小屋に一宿されたといふ逸話に基いたものだといふ。

【句意】 穂屋を造るために刈られた芒が殘つてゐて、その上に雪が散りかかつてゐる光景である。

【鑑賞】 元祿元年秋、芭蕉は越人を連れて、信濃の姨捨山へ月見に行つた。此の句はその歸りの吟であらう。成美の説に、撰集抄に「信濃路の穂屋の芒に雪ちりて下葉は色の野邊のおもかげ」とあるとあるが、或は此の歌の言葉を取つたものか。

草庵の留居をとひて

衰老は簾もあげず庵の雪　其角

【句意】 庵主の老衰した事には、簾もあげず、雪の降るにまかせてあるといふ意。

【鑑賞】 五元集に「芭蕉空庵を訪ねて」とある。元祿三年冬の吟であらう。元祿三年冬は芭蕉も心氣衰滅して堅田に病んだ位であるから、それに思ひ寄せて、衰老はと置いたのであらう。簾もあげずとは白樂天の香爐峰雪撥簾看から思ひ付いた事であらう。衰老はと頭から置いた所が其角調で、強い重々しい感じを與へてよい。

雪の日は竹の子笠ぞまさりける　尾張　羽笠

【句意】雪の日は竹の子笠の方が風流でよいといふのであらう。

【鑑賞】理窟つぽい句で、似非風流のやうな主觀である。

誰とても健ならば雪のたび　長崎　卯七

【句意】體が壯健であるなら、雪中の旅は面白いものであるが、自分は病身だからそれも出來ず、情なく思ふといふのだらう。

ひつかけて行くや吹雪のてしまござ　去來

【語意】てしまござ―とは攝津豐島郡より產出する蓙である。七部通旨に、「豐嶋蓙、美濃國てしまといふ所より出る產物也。深瀨・梅原の邊多く出すよしなり。云々」ともある。「尤草紙」に狹きもの品々と言へる條下、てしま、てしま蓙云々とある。

【句意】てしま蓙をひつかけて吹雪の中を行く意。

【鑑賞】平凡な句である。てしま蓙が狹いから變つた趣もあらうが、つまらぬ句である。

乳呑子に世を渡したる師走哉　青亞追悼　尙白

【句意】乳呑子を此の世に殘して十二月に死んだといふ意。中七の技巧がわるい。

から鮭も空也の痩も寒の內　芭蕉

【語意】 **から鮭**—鮭のから干しである。**空也上人**—釋光勝。京の人。天慶元年京に入り、市中を彌陀を唱へて勸化したので、時人から市上人と言はれた。天祿三年九月、年七十七で寂した。空也宗の開祖。

【句意】 から鮭がうまく食へるのも寒の内であるし、空也僧の難行も寒の内であるといふ意であらう。

【鑑賞】 支考の説に、から鮭には寒中の藥喰を寄せ、空也には寒夜の修行を結んだので、瘦の一字は互照の格であると(古今抄)。梅丸の説に、空也は寒中に苦修し、空鮭は食ひ滅らされるから、瘦の一字を得たのである。支考の互照とは誤で、之は瘦の一字がすべて鮭と空也とに關つてゐるから、双關の格であると(酒堀)。寒中空鮭がだん〳〵からび行くにつけて、空也上人寒中の苦行を合せて作られたのであらう。空也と干鮭をかけ合せたのではなく、又瘦の一字に双關の心があるやうにも思はれないと(大鏡)。併し空鮭も空也の瘦もといふと、瘦の字が空鮭と空也に關るやうに思はれるが、空鮭の瘦はから〳〵に乾からびたのでなく、肉が締る程度の瘦と考へたい。支考の藥喰と言つたのは尤もな説で、から〳〵に乾からびて了つては、藥喰にもなるまいと思ふ。干鮭に脂が乘つて、食べてうまくなるのは寒の中で、乾からびては食べてもうまくなからう。私はただ鮭の瘦と空也僧の修行の瘦と對照させて、そこに一脈通ずる俳味の直觀を味はせた句作法だらうと考へる。から鮭と增賀聖の逸話もあるやうに、空也念佛とから鮭とは、そこに何等かの佗しい感じの融合がありはしまいか。註書多くは空也の瘦を空也上人の瘦と解してゐるが之は空也上人の難行でなく、空也念佛の乞食坊主の瘦と見たい。その例は他にもある。此の句は芭蕉が心の味を言ひ取らうとして、數日腸をしぼつた句であつたといふ。

鉢たゝき　鱗は顔に似ぬものか　乙孟

【語意】 **鉢たゝき**—空也念佛の遺俗で、陰曆十一月十三日(空也忌)から四十八夜の間、洛内・洛外の三昧堂を鉦を鳴らし、和讃を唱へ、竹杖を以て瓢を鳴らし、巡り歩く乞食坊

主である。常は杖の先に茶筌をさし、賣り歩いたものであるが、冬になると瓢を鳴らして空也僧となつた。服裝は萠黄に鷹の羽を打違へた紋服を着てゐたから、僧にして僧にあらずと言つた風であつた。芭蕉はこの鉢叩きの歌に非常に興味を持つてゐた。去來の鉢叩きを聽くの辭などもあつた。

【句意】 鉢叩きは風雅なものであるが、その顏を見ると、髭だらけな醜い顏をしてゐるといふ意。主觀にゆとりのある所が、元祿俳人の見方。

一月は我に米かせ鉢たゝき　丈艸

【句意】 鉢たゝきよ。せめて一月だけでも、貰ひ溜めた米を貸せといふ意。

【鑑賞】 鉢たゝきに米をせがむ所に、丈草の脫落した氣持が表れて面白い。貧乏はしてゐても、こんな洒落な事が言へるのもをかしい。

住吉奉納

夜神樂や鼻息白し面ゝの内　其角

【語意】 住吉奉納—住吉明神へ奉つた句。住吉明神とは底筒男・中筒男・表筒男の三神を祀り、攝津住吉村にある。神樂——里神樂。面をかぶり、無言で踊る。十一月の行事。

【句意】 住吉明神の夜神樂に、面を被つてをどる内から、鼻息が白く出るといふ霜夜の寒さを言つたもの。嚴肅なお神樂を冷やかした氣持も見える。

節季候に又のぞむべき事もなし　伊賀　順琢

【語意】 節季候—十二月二十二日頃から、笠の上に羊齒の葉を挿し、赤い布で顏をかくし眼ばかり出して、二人或は四人連立ち、人家に入つて踊り、米錢を乞ふ乞食である。江戸

では編笠をかぶり、寶づくしなどを畫いた紙の前垂を下げ、割竹を兩手に持ち「せきぞろござれや、せきぞろめでたい。」などとやかましく囃立てゝ、門口へ踊り込んだもので喧しい乞食である。

【句意】節季候はむげに卑しいものだから、又望むやうな事もないといふのだらう。鉢たゝきなどは、同じ物乞でも風雅な心を誘ふものであるが、節季候はやかましいだけで、一向つまらぬものだといふ意。

家〳〵やかたちいやしきすゝ拂　伊賀　祐甫

【語意】煤拂ひ—年の暮に家内の煤を拂つて大掃除をする。

【句意】どの家でも煤拂ひの時はいろ〳〵な風をしてやるから、かたちいやしきと感じたのである。忙しくなりもふりも構つてみられぬ狀を、滑稽に見て言つたのだらう。

乙州が新宅にて

人に家をかはせて我は年忘　芭蕉

【語意】年忘—年の暮に、一家族或は親類友人等打ち寄つて、一年の苦を忘るべく、宴會を開くことをいふ。

【句意】乙州に家を買はせて、自分はその新宅で、悠々と年忘をしてゐるといふ意。曲水に送つた手紙に、「臘月末京都を退出で、乙州が新宅に春を待。」とある。

【鑑賞】元祿三年十二月の吟であらう。芭蕉の貧しい旅人の境遇から觀じて、多少誇り氣味のある句である。

弱法師我門ゆるせ餅の札　其角

【語意】 弱法師—乞食である。昔江戸には仕切札と言つて、乞食頭に金をやつて、物貰ひの來ないやうに、仕切らせる札があつた。年末の餅貰ひの仕切札は、たゞ印を押したばかりの四角な紙で、それを門口に張つて行く。

【句意】 俺の所は貧乏だから、餅の仕切札を張りに來たつて、やる金はないから許してくれといふのである。

年の夜や曾祖父を聞けば小手枕　長和

【句意】 大晦日の夜はどの家でも忙しいものだけれど、曾祖父は何もする事がないから、手枕をして、樂々と寢てゐるといふ意。

薄壁の一重は何かとしの宿　去來

【語意】 年の宿—大晦日の家。

【句意】 俺の家は薄い壁一重をへだてて、年を越す貧乏人であるから、年が去らうが、新らしく來ようが、何の變つた事があらうかといふ意。

くれて行く年のまうけや伊勢くまの　同

【語意】 年のまうけ—年越しの準備。伊勢・熊野—伊勢は太神宮、熊野は紀州熊野神社。

【句意】 伊勢や熊野は、歳暮になると、新年の祭事の準備をするので忙しい。お籠をする人もあらうし、正月のお祝を受ける人もあつて、嚴肅な中にも色めいてゐるといふ意。

【鑑賞】 一説に、伊勢や熊野は伊勢暦・伊勢海老・熊野炭・熊野鯨などの産物を出し、是等をもつて新年の祝をすることだから、年の暮からそれ〴〵用意するとあるがどうか。

大年や手のおかれたる人ごゝろ　羽紅

【句意】 大晦日は人の心がずるくなつて居るので、手が附けられないといふ義。「打聽」に「利欲ノタメニ奔走スルハ、アキレタル人意ヨトナリ。」とある。

【鑑賞】 平凡な句である。一年の總決算をする日だから當前である。

やりくれて又やさむしろ年の暮　其角

【句意】 年の暮に物を人に皆やつて了つて、又元の木阿彌の貧乏世帶、莚一枚の住居となつたといふ事である。

いね〳〵と人にいはれつ年の暮　路通

【語意】 いね〳〵—去ね〳〵である。

【句意】 年の暮の忙しい際に、暢氣な事を言つて、何時までも厄介になつて居るので、家人から歸つてくれと言はれたといふ意。路通だから同情も湧く。

年のくれ破れ袴の幾くだり　杉風

【句意】 幕府の御用をつとめてゐる境遇であるから、今年も何本となく袴を破つて了つた。年の暮にその破れ袴を見ると感慨が深いといふ意か。

【鑑賞】 杉風は鰹屋市兵衛と言ひ、幕府の御用商人を勤めて居たのだから、一説に、年の暮で忙しく、ひだも分らない破袴となつたといふ説もあるがどうか。

猿蓑集卷之二

夏

有明の面おこすやほととぎす　其角

【句意】起きようと思つて、枕から顔を上ると、時鳥が二聲三聲かすかに啼いて通つた。

【鑑賞】序文に其角は「此の道の面起すべき時なれや。」と言つて、猿蓑集の刊行を俳道の名譽であると推奬した關係から、時鳥のやうな風雅な鳥の一聲によつて、雅人の眼を覺すといふ寓意の句にしたのである。そしてそれを二卷の始めに出した事は、撰者の周到なる用意で面白い。

夏がすみ曇り行方や時鳥　木節

【句意】遠くの空が夏霞に曇つてゐる。そこを行方も知れず時鳥が啼いて行く。

野を横に馬引きむけよほととぎす　芭蕉

【句意】元祿二年奥羽行脚の途次、奈須の黒羽の館主から、馬で送られた其時、馬の口を執つてる男から短册を所望され、書き與へた句である。時鳥がかすかに啼いて通るから、野を横に見るやうに、馬を引向けてくれといふ意。

【鑑賞】一說に、此の句は頼政の「およぶべき雲井ならねど時鳥駒引きむけてしたふ聲かな」に思寄せた卽興であると。輕い親しい氣持のする句である。

時鳥けふにかぎりて誰もなし　尙白

【句意】時鳥が面白く啼いて通るが、今日に限つて、共に聞くべき友の居ないのは殘念であるといふ意。

【鑑賞】今日から考へると、淡々たる主觀句ではあるけれど、元祿頃はまだ情味の深く入つた句として、喜ばれたのであらう。時鳥に對して亡き人を憶ひ出すやうな句は、特別な感動でもないと、一向頭にひゞいて來ない。

ほととぎす何もなき野の門ン構　凡兆

【句意】野寺であらう。門前に眼を遮るものもない、打ち開けた野を控へて居る。彼方の空を時鳥が啼いて通るといふ光景。

【鑑賞】何もなき野がよい。印象的な新しみのある句。

ひるまではさのみいそがず時鳥　智月

【句意】時鳥は夜聞くべきものであるから、晝までは聞く人の方でも、そんなに急いで聞かうともしないといふのである。

【鑑賞】理窟つぽいやうな句で面白くない。

蜀魂（ホトトギス）なくや木の間の角樽（スミヤグラ）　史邦

【語意】角樽―城の隅に建てた櫓。

【句意】時鳥の啼き行く遠望である。木の間から城の角の櫓がチラ〳〵見えて、時鳥が遠く啼いて行くといふ意。廣重の畫にでもありさうな景色である。

入相のひゞきの中やほとゝぎす　羽紅

【句意】夕暮の鐘が物寂しく聞えて來る中に、時鳥がかすかに啼き渡る光景である。

【鑑賞】入相の響の中やがよい。初夏の黄昏の憂鬱な心持が出て面白い。

ほととぎす瀧よりかみのわたりかな　丈艸

【語意】わたり—ほとり。わたりを瀬のやうな所と解くのはどうかと思ふ。瀧の上は川が急に勾配がついてゐるので、普通渡り歩けるやうな所とも思はれない。

【句意】兩岸は樹木鬱蒼として茂り、その間から瀧が落込んでゐる。その瀧よりずつと上手の方に當つて、ほとゞすが鳴いて通るといふ意。深山の曉方の光景であらう。自分も若い時よくこんな景色に出會つた事があつた。時鳥は空高く飛ぶ鳥で、その聲もはつきり聞きとれない位な高さにある。深山の幽邃な光景はよく出てゐる。

心なき代官殿やほととぎす　去來

【語意】代官—幕府直轄の地を支配する役人で、年貢公事等を掌る。

【句意】意地の悪い代官が、年貢をひどく取り上げるので、土地の百姓から怨まれて居る。今日も名主が村の總代として代官屋敷へ伺ひ、いろ〳〵訴へて見たけれど、なか〳〵聞き入れる氣色もない。折柄時鳥が血を吐くやうな思で空を啼き渡り、暗に百姓塗炭の苦しみを告げるやうであつたといふ意であらう。

【鑑賞】複雜した人事を描いた句である。芝居めいた句とも言へよう。去來にかうした趣味があつた事は、前の尙白の時雨の句の入選でも分るかと思ふ。

こひ死なば我塚でなけほととぎす　遊女奥州

【句意】 自分が戀死んだなら、子規よ、自分の塚へ來て啼いてくれよといふのである。作者が苦界に身を沈めて居る人だけに、心の悲しい悶は同情される。

【鑑賞】 撰集に遊女の歌を出した事は、古今集（白女）にも、後撰集（檜垣）にも、續後拾遺集（宮木）にも、新古今集（奥州）にも見えてゐる。猿蓑集もそれ等和歌の撰集の例に倣ひ選んだものであらう。但し感情としては平凡な事である。

松島一見の時、千鳥もかるや鶴
の毛衣とよめりければ

【文意】 曾良が芭蕉の供して松島見物に行つたのは、元祿二年五月であつた。松島一見の時とはそれを指したのである。千鳥もかるやつるの毛衣とは、「無名抄」に、祐盛法師寒夜の千鳥といふ題で、「身にぞ知る眞野の入江に冬の來て千鳥もかるやつるの毛衣」といふ歌を詠んだので、人々珍らしがつて居ると、素覺といふ人がそばから、面白い事は面白いが寸法が合はなくはないかと言つたので、大笑となり、興もさめて了つたとある歌で、それをたま〳〵曾良が思出して、ひとつ其歌の心を眞似、松島のほとぎすを寒夜の千鳥に置換へて作つて見ようとしたのである。此の前書は「奥の細道」には見えない。或は猿蓑入撰の時撰者の附けた前書であらうか。文章が簡單に過ぎて、曾良が千鳥の歌を詠んだやうにとれるがさうではない。

松島や鶴に身をかれほとゝぎす　曾良

【句意】 時鳥よ、お前は古歌に詠まれた鶴の毛衣を着て、鶴のやうになつて、永久此の地を啼渡り、雅人の心を樂しませてやるがよいといふ意。松はめでたい木であるから、鶴を連想して、時鳥に鶴を附けたのである。めでたづくしの物を取附けた句で感心しない。

うき我をさびしがらせよかんこ鳥　芭蕉

【句意】閑古鳥よ、此の嫌な辛い俺を寂しがらせてくれよといふので、芭蕉は閑古鳥の清寂な聲によつて、心のいたましい苦惱を忘れ、寂しい人生を慰めようと願つたのである。閑古鳥は背の黑い、腹の淡黃な、時鳥に似た鳥である。よく人里離れた地に啼く、聲の朗かな鳥である。

【鑑賞】此の句は嵯峨日記四月二十二日の條下に出て居るもので、或寺に獨居して、寂しさを主とした時の句である。或寺とは伊勢の長嶋の大智院で、はじめは「うき我を淋しがらせよ秋の寺」と詠んだのを、後にかく改作したのである。芭蕉のセンチメンタルな心持のよく表れて居る句と思ふ。

旅館庭せまく庭草を見ず

若楓茶いろになるも一さかり　膳所　曲水

【語意】旅館—膳所の城主本多侯の江戸の下屋敷であらう。

【句意】楓が若々しく芽を吹いて、いさぎよく見えても、秋霜一度來ると、忽ち茶色になつて了ふ。若々しい頃も一とさかりであるといふ意であらう。

【鑑賞】之も嵯峨日記二十二日の條下に出て居る句で、江戸から曲水が芭蕉に與へた手紙の中に、「我が住むところ、弓杖二丈ばかりにして、楓一本外は青き色を見ず。」と書いて、此の句が出て居る。前書は芭蕉の附加へたものであるといふ說もあるが、撰者の筆であらう。

四月八日詣二慈母墓一

花水にうつしかへたる茂り哉　其角

【句意】花や水を手向けて、亡き母を弔うたのも、昨日の夢となり、今は墓のまはりも、青葉茂れる眺となつたといふのである。

【鑑賞】其角の母は榎下氏。妙務尼と號し、貞享四年四月八日、歳五十七で歿し、芝二本榎上行寺に葬つてある。元祿三年七月、其角は慈母追福のため、一夏百句を撰み、「花摘」と題した。此の句は亡母の三周忌墓參の句である。

葉がくれぬ花を牡丹の姿哉　江戸　全峰

【句意】牡丹の花の大きく咲き滿ちた狀を形容して、葉がくれぬ花と言つたのである。

別僧

ちるときの心やすさよ米囊ノ花　越人

【句意】僧をけしの花に譬へ、芥子の花の綺麗さつぱりと散つて了ふやうに、僧も亦何の執着を殘さず、飄然と去つて了ふといふ意。

【鑑賞】僧とは路通である。此の句は越人が路通と別れた時の句であるが、後に路通の還俗が芭蕉の不快を買ひ、同門の人々とも仲違ひとなつたので、わざと別僧と題して、撰者の入選した句である。

智惠の有る人には見せじけしの花　珍碩

【句意】芥子の花は果敢なく散つて了ふから、智者には見すべき花でない。智者に見せたら、定めし馬鹿〳〵しい花ぢやといふだらうとの意。此の理窟がわるい。月並である。

翁に供せられて、須磨明石にわたりて　亡人

似合しきけしの一重や須磨の里　杜國

【句意】 須磨は源平の古戰場であるから、榮枯盛衰の理を連想して、かゝる里に散り易い果敢ない芥子の花の咲いて居るのは似合つて居るといふ意。

【鑑賞】 芭蕉が杜國を連れて、吉野行脚を思立つた事は、卯辰紀行（貞享四年卯年から、貞享五年辰年に渡る紀行）に見えて、杜國は子供らしい萬菊丸といふ名に改め、すべて道中の不便を勞つたのである。「卯辰紀行」を見ると、杜國は芭蕉と奈良で別れて居り、芭蕉一人須磨明石へ旅行したやうに思はれるけれど、此の度の行脚中に見物した名所舊蹟を、卯月廿五日の日附で、芭蕉萬菊の名で、惣七に通知した手紙によつて考へると、二人で須磨明石の名所を探つたものゝやうに思はれる。杜國は元祿三年二月歿して居るから、亡人杜國と書いたのである。「夢に杜國を見、涕泣して覺む。」と嵯峨日記に記して居る位、杜國と芭蕉の交情は濃やかなものがあつた。

青くさき匂もゆかしけしの花　嵐蘭

【句意】 芥子の花は、青臭い匂までなつかしいといふ意。平凡な句である。

井のすゑに淺〳〵清し杜若　半殘

【句意】 井戸流しの溝先に、毎朝かきつばたが空色をして、氣持よく咲いて居るといふ、すが〳〵しい光景であらう。

【鑑賞】 「大鏡」に、淺々は書損で、朝々淸しであらうといふけれど、漢詩に「疎影橫斜水淸淺」だとか、「石瀨兮淺々」とあつて、淺々淸しと讀ませた事は、誤りでもないと何丸は言つて居る。國語にあさ〳〵といふ字はあるが、淺いといふ意味ではない。漢詩の淺々はよいけれど、それを淺さ〳〵として、淺々といふ意味に用ふる事は、穩かでない。やはり淺々は朝々の書損であらう。或は淺々は淺々（あさ〳〵）とよませて、淸淺といふ意味と、朝々といふ意味とを兼ねさせたものだらうか。

起き出でて物にまぎれぬ朝の間の

起〳〵の心うごかすかきつばた　仙花

【句意】前書の和歌は、「起出て物にまぎれぬ朝の間の心やもとの心なるらん」といふ古歌で、朝起き出した刹那、物事に入り雜らぬ純一無雜な心が、本來の心であるといふ意味から、その純一無雜な朝々の心を、杜若が動かすと言つたのであらう。

題二去來之嵯峨落柿舍一　二句

豆植うる畑も木べ屋も名所哉　九兆

【句意】豆を植ゑる畑も、木を入れて置く部屋も、昔はしか〳〵いふ名所であるといふの

である。

【鑑賞】落柿舍は嵯峨に於ける去來の別莊である。元は或る有德の人の數奇を凝らして造つた家であるのを、去來が買つたのである。家のそばに柿の木四十本あり、或時都から商人が來て、立木のまゝ一貫文で柿を買ふ事を約したが、朝になつて見ると柿が悉く落ちて了つたので、商人に錢一貫文を返してやつたといふ事が、去來の落柿舍ノ記に出て居る。その落柿舍へ芭蕉は元祿四年四月十八日から五月四日まで住ひ、障子をつゞくつたり、草をむしつたり、五重の器にさま〳〵の菓子を盛り、名酒一壺、夜の衾、調菜の物、すべて去來の心附で不自由なく、淸閑をたのしむ事が出來た。落柿舍は前に大堰川を控へ、後に嵐山を望み、内は昔の主人の作つたまゝ所々頽破し、ほりものした梁、畫ける壁も風に破れ、雨にぬれて、奇岩怪松も葎の下にかくれるといふ始末、併し竹椽の前の柚の木一本、香高くして昔の面影が忍ばれる程であつた。嵯峨日記とは實に芭蕉在庵中の日記である。その二十日の條下に、一張の蚊帳に五人入つて夜も寢られず、夜半過ぎより皆起きて、曉近くまで話し明したとあるし、廿四日の條下には、題二落柿舍一として此の句が出て居る。

凡兆は芭蕉が落柿舎に入る時から附いて居て、其後も二度ばかり訪ねて居る。此の句は次の句と共に、落柿舎の閑寂な住居をほめた句である。

破垣やわざと鹿の子の通ひ道　曾良

【句意】落柿舎の垣も破れて、わざと鹿の子の通れるやうに道がついて居るといふのである。わざとが俗である。

南都旅店

誰のぞくならの都の閨の桐　千那

【語意】南都—奈良。七代七十餘年の帝都で、元明天皇以來文運隆盛を極めた古い都である。

【句意】千那は近江堅田本福寺の住職で、此の旅行は元祿三年五月法隆寺南無佛の太子の開帳に行つた時の吟である。始めは「橘や奈良の都の屋根の桐」と言ふのであつたが、猿蓑入選の時、かく改作されたものであらう。閨の窓際に桐が植つて、ふさ〳〵と紫の花を垂れてゐる。奈良の旅店で、かうした光景に接した事は、何となく古典的な感じがする。窓下を歩く人があつて、部屋をのぞいてゐる樣である。一層なまめかしい聯想がするといふ意であらう。

【鑑賞】伊勢物語に、「昔男ありけり。奈良の京春日の里にしるよしして狩にいにけり。其里にいとなまめきたる女はらから住みけり。此男かいまみて、云々」とある故事から思ひ付いた句であらう。古註に、此の句は奈良の都の昔に引かへて荒れはてたる狀であるとあるが、多少その感じもないことはない。千那は裕福な地位にある僧侶であるから、旅行の同伴者も相當な者であつたらうと思ふ。その人の寢る部屋を外から覗くといふ所に、一抹の旅店の侘しさはあらう。鹿が覗くといふ意味ではあるまい。やはり人と見たい。

洗濯やきぬにもみ込む柿の花　尾張　薄芝

【句意】柿の木の下で洗濯してゐると、柿の花が衣に落ちて來る。うつかりもみ込んで了つたといふ、佗しい田舍の光景であらう。

【鑑賞】農家の質素な簡單な生活が、端的に表はされてゐる。柿の花といふ景物が、洗濯にふさはしいのであらう。

豐國にて

竹の子の力を誰にたとふべき　九兆

【語意】豐國―東山阿彌陀ヶ峯の麓にある秀吉の廟である。之は莊嚴を極めたものであつたが、徳川氏の世になつて頽廢した。石川丈山の「覆醬集」中題豐國神社廟壁の詩に、

「零落東山古廟郭。蒼苔蔓草上頽墻。英靈飛散無巫祝。秋月春風作主張。」とある。

【句意】秀吉の威勢を竹の子に譬へた句である。廟の庭に竹の子が勢よく生えてゐる樣を見て、秀吉の威勢は何人も較ぶる者がなかつたと感じたのであらう。微賤から身を起して關白まで經上つた人物に連想を持つて、感嘆した句であらう。

たけの子や畠隣に惡太郎去來

【語意】惡太郎―いたづら小僧。

【句意】農家の裏に竹藪があつて、竹の子が勢よく生えてゐる。畠隣のいたづら小僧が主人の隙を見て盜みに來る。

【鑑賞】如何にも簡素な田園生活が表はれて面白い。畠隣に惡太郎が居るといふ例は何處にも見受ける。始末に了へぬものである。

たけの子や稚き時の繪のすさび　芭蕉

【語意】 **繪のすさび**—元祿四年作の「嵯峨日記」四月二十三日條下に繪のすさみとある。芭蕉は幼時より繪に趣味を持つた。長じて門人森川許六について習ひ、專ら粗畫であつたと言はれてゐる。許六は繪を狩野永眞安信に學んでゐるから、芭蕉の畫風も狩野風であつた。

【句意】 幼時描いた竹の子の繪を見ての思ひ出であらう。源氏の君が紫ノ上と幼時雛を作つたり、繪を描いたりして遊んだといふ古典的な連想も幾らかあるのだらう。

猪に吹きかへさるゝともしかな　正秀

【語意】 **ともし**—照射(トモシ)で、鹿とか猪などを射捕る爲に、闇夜山の小蔭に篝を焚いたり、松明を串につけたりして、動物が火の影に寄つて來る所を、ねらひ打ちする一種の獵法である。此の場合は松明を串につけた所謂火串(ホグシ)の場合である。

【句意】 獵師が火串を仕掛けて動物を待つてゐると、大きな野猪が猛烈な勢で飛んで來た。その風のあふりで照射も吹き返される位であるといふ意。

【鑑賞】 荒くれた獵師が猪を待つてゐる物凄い場所の中に、案の定猪が飛び込んで來て、ともしも吹き返される勢に、獵師達が膽を冷してゐる壯絶な光景はよく表はれてゐる。猪でなければ面白くない。

明石夜泊

蛸壺やはかなき夢を夏の月　芭蕉

【語意】 蛸壺—蛸を捕る爲に海底に沈め置く壺の事で、明石ならずとも、三崎などでもよく見る所である。播州明石邊の海はよく蛸の捕れる所で、漁師が壺を幾つとなく海底に沈めて置くと、蛸は岩穴と思つて壺の中に入つて寢てゐる。その時分を窺つて捕るのであ

る。普通素燒の壺で、繩につなぎ、桐の木の浮をつけて、海に沈めて置くのである。

【句意】 前書に「明石ノ夜泊」とあるから、漁師の海に沈めた蛸壺を濱に引上げる狀を見ての吟であらう。靜かな海は鉛の樣に凪いでゐる。空には月がぼんやりと懸つて居る。蛸は定めしいゝ氣持になつて、此の月夜を壺の中に入つて安らかな夢を見てゐる事であらうといふ意。「笈の小文」に、須磨の浦の句が三句ほど出て、「此浦の景は秋をむねとするなるべし。悲しさ淋しさいはんかたなく、秋なりせばいさゝか心のはしをも言ひ出づべき物をと思ふぞ、わがの心匠の拙きを知らぬに似たり。云々」とあつて源平の戰を連想し、平家の悲劇を悲んで、千歲の悲みが此の浦に止まり、白波の音を聞くにさへ憂さが多いといふ樣な事を言つて居るから、その面影を蛸壺にはかなき夢を見てゐる蛸の有樣に、思ひ比べる意味も含まれてゐよう。

【鑑賞】 貞享五年夏の作である。「笈の小文」に出。許六の「自讃ノ論下」に風國の「初蟬」を非難して『「鮹壺を駒が林の火桶かな　泥足」これ眼ある人のすべきことにもあらず。又撰者の入るべき句にもあらず。忝けなくも猿蓑に「蛸壺やはかなき夢を夏の月

翁」、是師の名句といひ置きたまへること、一天下知らぬ人なし。これおのづから制の詞なり。下はいかやうに言ひかへても、蛸壺この句の眼なり。玄梅があつめたるに、惟然が句に「長閑なる秋とや蛸も壺の中」是師の句の下手なるものなり。予が集の時も、この句かきて送れり。大きにいやしみ、我黨は小便壺へかい捨つるなり。云々」』

輕いユーモアのある句だが、大したものではない。芭蕉の同情深い佗しい氣持はよく出てゐるが、許六のいふやうな名吟でもあるまい。惟然の句には脫落した面白い一節があつて、惟然だけに笑はせるが、小便壺へ捨てるとはひどい事を言つたものだ。

君が代や筑摩祭も鍋一つ　越人

【語意】 筑摩祭―近江國坂田郡筑摩の庄、筑摩神社の祭である。今は鄕社で、坂田郡入江村大字筑摩にある。祭祀は四月朔日、或は初めの午の日。祭神は御食津神(みけつ)。元來筑摩の庄は大膳職の御厨の地であるから、稻食を司る神をこゝに祭つたのである。此の祭には奇習

があつて、村人が婚姻する時には、釜や鍋をかぶつて、社にお參りする。再婚の者は二枚三婚の者は三枚かぶつた。「伊勢物語」に、「近江なるつくまの祭はやせなんつれなき人の鍋の數見む」とあるから、かゝる行事は平安朝以來で、歴史は隨分古かつた。後この業平の歌詞によつて、淫靡な風俗になつたので、禁止された。今日では八歳の少女八人が緋の袴をはいて、紙の鍋をかぶつて、供奉する事になつたといふ。

【句意】 天下泰平、國土よく治まり、萬民その業に安堵する聖代の事であるから、筑摩祭も一つの鍋をかぶつた者ばかりで、みだらな者は居なくなつた。

【鑑賞】 君が代に筑摩祭といふ古典的な祭祀を取合せた所が面白い。越人の古典趣味を表した句の一つ。

五月三日わたましせる家にて

やね葺と並んでふける菖蒲哉　其角

【語意】 わたまし—轉宅。やね葺—家根屋。菖蒲—古名アヤメグサ。水澤に生ずる。葉・花・根、石菖に似て大きく、長さ四五尺に及び、香氣がある。端午に此の葉を軒にさして祝ふ。

【句意】 五月五日の端午の節供も近付いたので、家根に上つて菖蒲をさしてゐると、側に家根屋がゐて、切りに家根を葺いてる。とんととん、とんとん、ととんと四角な金槌を振つて、家根板を叩く。その音が如何にも朗かで、五月の空にひゞき渡るといふ情景。

【鑑賞】 作者が其角だから面白い。豪放な、無頓着な其角が、尻をからげて、梯子を上つて軒に菖蒲をさす。「やあ、御勢が出ますな。」「いや、おやかましう御座います。いゝお天氣樣で。このぶんならあさつてのお節供も賑やかで御座いませう。」などといつたやうな問答が、互に取交される場面。其角の大きな體が動く。

粽結ふかた手にはさむ額髮　芭蕉

【語意】 粽—糯米を水に浸したり、或は米の粉を揑ねたものを、菰や笹の葉などに卷いてむしたもの。端午の節供に食する。額髪—額の兩側の髪を眉尻まで梳き、先を切つたもの。中古以來若い婦人の用ひた髪形。うつむくと顔へふりかゝり、仕事の邪魔になるので耳へ挾んで置く。「源氏物語」箒木の卷に、「君の御心はあはれなりけるものを、あたら御身をなどいふに、みづから額髪をかきさぐりて、あへなく心ぼそければ、打ひそみぬ。云々」、又總角の卷に、「心手はしらず。顔に額髪をひきかけつゝ、いろどりたる顔つくり云々」ともある。「去來文」に、「是も源氏のうちよりおもひ寄られ候。云々」とあるから此の句は源氏の古事によつて作つたものと見える。

【句意】 少女が粽を作りながら、片手で額髪を耳に挾んだ、なまめかしい姿態を言つたのである。土芳の「あかさうし」に、「此句物語の體となり。去來集撰の時、先師の方より云ひ送られしは、物語の姿も一集にはあるべきものとて送るとなり。云々」とある。

【鑑賞】 古典趣味の句で、中古の若い婦人の艶な擧動はよく描かれてゐる。

隈笹の廣葉うるはし餅粽　　江戸　岩翁

【語意】 隈笹—笹の一種。高サ五六尺に達し、細い莖と廣い葉が特色である。古く育つと葉の緣に白い曇がかゝる。よく鮨の皿などに用ひられる。熊笹と書くは誤である。餅粽—糯米で作つた粽。

【句意】 隈笹の葉は幅廣く、青々として、如何にも涼しさうで、初夏の新鮮な氣持をよく表してゐる。粽はむすから、なほ水氣が附いて、笹の色をうるはしくさせる。

【鑑賞】 隈笹の粽の實感はよくつかまれてゐる。うるはしといふ氣持は隈笹の餅粽であるからうなづかれる。

さびしさに客人やとふまつり哉　　尙白

【語意】 まつり—加茂ノ祭。許六の「篇突」に、「祭とばかりは賀茂に歸する。余は皆里祭也。云々」とある。祭日は四月中の酉の日（みあれの日）、新暦では五月十五日に當る。京都上加茂・下加茂兩社の祭禮。下加茂の祭神は御祖（みをや）ノ神（玉依姫）、上加茂のは別雷（わけいかづち）ノ神である。加茂ノ祭は欽明天皇に始まり、社の司は皆葵をかざして參列したので、葵祭とも言はれた。當日は朝廷より勅使の參向があり、先づ下加茂の祭を終つて、上加茂に至る。行列は先驅・火長・看護長・檢非違使・山城使・內藏寮史生・御幣櫃・走馬・馬寮使・近衞使車・舞人六人・舍人・居飼・馬副・隨身等衣冠美々しく、花傘をさしなど壯麗を極めた。中古は源氏・枕草紙に記す如く盛大であつたけれど、應仁以來打絕えて、元祿七年に至り再興された。さびしさにと言つたのは再興以前の祭事であつたからであらう。

【句意】 まつりもすたれて淋しいから、土地の家では客に來た人に賴んで祭に參加して、景氣を附けて貰つたといふ意。

【鑑賞】 客人やとふといふ表現が、句意を複雜にし、趣向を新しくする。當時の實況を知らなければ、此の句の氣持は味へない。實況を知つて味ふべき句である。

五月六日大坂うち死の遠忌（おんき）を吊ひて

大坂や見ぬよの夏の五十年　伊賀　蟬吟

【語意】 大坂討死の遠忌—蟬吟は芭蕉の故主伊賀上野の城代藤堂主計良忠の俳號である。良忠の父は藤堂新七郎良精（よしきよ）、祖父は同良勝である。良勝は元和元年五月六日（落城七日）、大坂八尾の口で、木村重成の兵と戰ひ、家來の松尾甚兵衞等と討死した。その五十年忌は寬文四年に當る。遠忌とは三年以上の忌。吊は弔の俗字。

【句意】 重成最後の一戰のため、藤堂勢は散々に破られて、良勝以下の戰死者を出した。その日の戰は隨分激しかつた事であらう。祖父の壯烈な死を想ふと、五十年の今日なほ血湧き、肉踊るの感がする。惜しいかな此の戰は見ぬ世の夏であつた。

【鑑賞】 句としてはたいして價値あるものではない。作者が芭蕉の故主であり、此の戰に芭蕉の親族といはれる松尾甚兵衞などが死んでゐる關係上、撰者は師の故主に對して敬意

を表すべく入れた句のやうである。

奥刕高館(ダテ)にて

夏草や兵共が夢の跡　芭蕉

【語意】奥州高館―陸中平泉の東北にある丘陵。「奥の細道」に、「三代の榮耀一睡の中にして、大門の跡は一里こなたに有。秀衡が跡は田野に成りて、金鶏山のみ形を殘す。先高館にのぼれば、北上川南部より流るゝ大河也。衣川は和泉が城をめぐりて、高館の下にて大河に落入。……偖も義臣すぐつて此城にこもり、功名一時の叢となる。國破れて山河あり。城春にして草青みたりと、笠打敷て、時のうつるまで、泪を落し侍りぬ。」とあつて、此句を出す。高館は義經の居城であつた。はじめ義經鞍馬を逃がれ、秀衡を頼つて奥州へ落ちたので、秀衡これがため衣川附近の丘に館を造り、義經を住はせ、高館殿と言つ

て尊敬した。秀衡歿後二子國衡、泰衡、頼朝に欺かれ、高館を攻めたので、辨慶・亀井・片岡等防戰よく力めたが城陷り、義經は自殺した。本文義臣とあるは、即ち彼等從臣を言つたのである。國破れて山河あり云々の詩は、杜甫の春望の詩、即ち「國破山河在。城春草木深。感レ時花濺レ淚。恨レ別鳥驚レ心。」の一句である。芭蕉はその草木深しを草青みたりと換骨して、俳味を添へたのである。

【句意】高館は今は草深い丘になつたが、昔は戰場で、僅の義臣が主君のために奮戰して果敢ない夢を結んだ所であつた。國は亡びても、山川は依然として舊態を改めない。草木は春になると、青々と芽を吹く。榮枯盛衰とは言ひながら、感慨無量の思がする。

【鑑賞】人口に膾炙した句だけれど、たいして勝れた作とも思へない。むしろ陳腐な感がする。本文の方が杜甫の詩を換骨して面白く味へる。本文あつての存在である。

這出よかひ屋が下の蟾(ヒキ)の聲

【語意】かひ屋—飼屋。養蠶家。一說に、猿や鹿を追ふために火を焚く小家だとか、或は蚊を拂ふために火を焚く家(鹿火屋・蚊火屋)、又は河の淀みに魚を集めて捕るための小屋などの說があるが、この場合何れも不適當である。錦江の「七部通旨」に、「蠶飼の仕法は國々に差別あり。莚又は笊に糸だてをしき、或は檜皮の盆わらだといふ物にて飼ひたて多く飼ふ者は板壁にて萱ぶきの別屋をたて、土間にして地より二尺程を始として、夫より上へ段々に棚をつり、尾花澤邊には是を飼屋といふ。秋田・鶴岡の邊にては養蠶家といふよし。蠶を喰はんとて、蟇の飼屋に出るなり。されば是を憂ひて、蟇に這ひ出でよと吟じ給ふなるよし。但し壁の中のきり〳〵す這ひ出で給へといふ源語をたち入れ給ふといふはさもあるべし。云々」とある。蟾—ヒキガヘル。蛙の一種。體肥大、動作遲鈍にして、隱濕の地に棲み、夜間出でて虫を喰ふ。

【句意】飼屋の床下に潛んで鳴く蟇よ。そんな所に居ないで、こちらへ這ひ出して來いといふ意。壁の中のきり〳〵す這ひ出で給へといふ句は、源氏「紅葉ノ賀」に見えて、頭ノ中將の言である。恐らく此の故事の俳諧化であらう。

【鑑賞】「奥の細道」によると、尾花澤の淸風の許に泊つて居つた時の吟で、涼しさを、眉掃を、蠶飼する人等の句に交つた卽興句である。蟇の不恰好な形を滑稽に感じて、這ひ出して來いと、親しげに呼びかけた句であらう。そこに芭蕉のユーモラスな氣持が表れて面白い。蟇が蠶を食ひに來るから、惻隱の情を起した、といふやうに解したくない。

此境はひわたるほどといへるもこゝの事にや

かたつぶり角ふりわけよ須磨明石

【語意】此境云々—この須磨・明石の間は、這つて渡る位の、近い距離であると言つたのも、こゝの事であらうか。這ひ渡る程とは、源氏須磨ノ卷に、「明石の浦はただはひわたるほどなれば、よし淸の朝臣の入道のむすめを思ひ出でて、文などやりけれど、返事もせず。云々」とある文による。かたつぶり角云々—莊子則陽篇に、「蠛蠓者、君

知レ之乎。曰、然。有下國二於蝸之左角一者上、曰二觸氏一。有下國二於蝸之右角一者上、曰二蠻氏一。時相與爭レ地而戰。伏尸數萬、逐レ北旬有五日而後反。云々」とある。須磨と明石は接近した地である上に、須磨は源平の古戰場であつた所から（「笈の小文」によると、芭蕉が須磨で作つた句は六句あるが、この句も明かに其の時の吟で、本文には須磨の漁師がきすごといふ魚を捕つて、砂の上に干して置くと、烏が飛んで來て、さらつて行くので、弓で威す狀を見て、「若し古戰場の名殘をとどめて、かゝる事をなすにやといとゞ罪深く、云々」と言つた記事が見える）、蠻觸の爭を連想したのである。

【句意】 蝸牛よ。須磨と明石に角を振分けて、その美しい風色を眺めなさいといふ意。

【鑑賞】 須磨と明石の間を、蝸牛の角の間に喩へた所が面白い。須磨は古戰場であるから須磨・明石を蝸牛角上の地と見立て、蠻觸の爭を連想した所に、古典趣味は含まれてゐるが、その趣味に捉はれないで、主觀の方を强く出した點が、典雅であり、新しくもあつてなつかしく味はれる。

五月雨に家ふり捨てゝなめくじり　九兆

【語意】 なめくじり—ナメクジ。蛞蝓

【句意】 毎日じめ〳〵した雨ばかり降つていやになる。塀の破目か戸袋になめくじが這つてゐる。この降るのに家を捨てゝ、よく出て來るものだなあと感心した。

【鑑賞】 なめくじは蝸牛と異り、殼をしよつてゐないが、蝸牛に似てゐる所から、家ふり捨てゝと言つたのである。この觀察が作者のユーモラスな氣持を表して面白かつたのだらう。凡兆らしくない句で、むしろ選者去來の趣味に近いものゝやうに思はれる。

ひね麥の味なき空や五月雨　木節

【語意】 ひね麥—前年取つた古い麥。

【句意】 旅中の五月雨である。片田舍の安宿に泊つて、雨に降り込まれ、永逗留すると、

拙い麥飯ばかり食はされ、閉口した。天氣はいつ晴れるやら分らない。氣が腐つて了ふといふ意。「逆志抄」に、「旅中五月雨の十日あまりも降りつゞきて、道中難儀なるにより、長逗留の内、食べなれぬひね麥の味なきにうむじ果てたるなり。云々」とある。

【鑑賞】「逆志抄」に、「是等の句を世に双關の句法といふなり。云々」とあるが、双關の句法ではない。双關の句法とは、「七部小鏡」說の如く、（から鮭 空也の）＼痩も寒の内とある句法で頭の五文字が中の一字にかかつて、意味を重ねる表現法である。「逆志抄」のやうに、ひね麥も五月雨も情なく、味がないといふ係りではない。意味から言へば、逆志抄の說のやうであるが、修辭法は上下の字が中の一字に係る譯ではない。双關とは修辭上の名目である。此の句はひね麥と言つた所に五月雨の旅中の難儀を强めて面白いのである。梅雨頃は既に麥も黃熟してゐるから、新麥を食はせさうなものだけれど、ひね麥であるから一層宿の侘しさが想像される。そこがよい。

馬土（うまかた）の謂ひ次第なりさつき雨　史邦

【句意】五月雨時の道中であらう。路が惡くて歩くに骨が折れるから、馬に乘つて行かうと思つて交渉すると、馬方に足もとを見られ、ヤレ酒代を出せの、馬が勞れるから休ませろとか、散々油をしぼられて、それでも仕方ないから承知して乘つた。イヤひどい目に逢つたものだと、つく〴〵こぼす狀である。

【鑑賞】平凡な句である。五月雨の道中だから多少興趣も湧くが、それだけの事である。

奥劣名取の郡に入りて、中將實方の塚はいづくにやと尋ね侍れば、道より一里半ばかり左の方、笠嶋といふ所にありと敎ゆ。ふりつゞきたる五月雨、いとわりなく打過ぐるに

笠嶋やいづこ五月のぬかり道　芭蕉

【語意】 名取郡―陸前宮城郡の南。中將實方―左近衛中將藤原實方。一條左大臣師尹の孫。侍從定時の子。母は左大臣源雅信の女。陸奥ノ守。長德四年十二月任國に於て薨ず。「十訓抄」によると、實方は一條天皇の御代殿上で藤原行成の冠を打落し、御怒にふれ、歌枕見て參れと言はれ、陸奥ノ國に遣された人で、後笠嶋の道祖神の社前で、不敬の行のあつたため、神罰を蒙り、社前に落馬して死んだと傳へられる。「新古今集」哀傷之部に、「みちのくにてひろき野中に、實方の塚とてありけるに、すゝきなどおひたるを見て」と詞書し、「くちもせぬその名ばかりをとどめ置きて枯野の薄かたみとぞ見る　西行」とある。

【文意】 奥州名取ノ郡に入つて、中將實方の塚は何處にあるかと尋ねると、道行く人がこの道から一里半ばかり左の方に笠嶋といふ所がある、そこにあると言つて教へてくれたが降りつゞいた五月雨に道がわるく、歩くのに骨が折れるから、仕方なく行かないで通り過ぎて了つたといふ意。

【句意】 笠嶋はどの邊であるかと、笠を傾けて見遣つたが、五月雨が降りつゞいて、道がわるく、行くのに骨が折れるから、殘念ながらやめた。

【鑑賞】 旅上の卽興で、普通の作である。芭蕉は實方といふ不遇な歌人に同情し、西行もその塚を訪れた事もあるから、弔つてやりたい心は切りであつたらうが、道がわるく、足もくたびれてゐたので行かなかつた。そこに無量の感慨はあつた事だらう。古典を知つて分る句で、句としての手柄はたいしたものではない。「奥ノ細道」に、笠嶋はいづこあるこの方が旅上の實感が強く出てゐてよい。

大和・紀伊のさかひ、はてなし坂にて、往來の順禮をとどめて奉
加すゝめければ、料足つゝみたる紙のはしに書きつけ侍る。

つゞくりもはてなし坂や五月雨　去來

【語意】 はてなし坂―果無山に通ずる坂。果無山（一二〇四米）は大和吉野郡南十津川村大字桑畑の西北にあつて、吉野郡と紀伊の東牟婁郡の界。之より本宮村（熊野神社がある）

迄三里。順禮—寺社を巡拜する人。奉加—神佛へ金を寄附する事。料足—錢。おあし。つづくり—「逆志抄」に、「つゝくりとはつづりつくらふといふ縮語也。」とある。假に修繕する意。

【文意】 大和と紀伊の國界なる果無坂で、往來の順禮をとどめて、村の人が奉加をすゝめたから、錢をつつんだ紙の端に、此の句を書き付けた。

【句意】 坂道の修繕も果しがない。こんなに降つてゐては、折角直しても、すぐ土砂が崩れて、道が惡くなる。村民が往來の順禮をとどめて寄附して貰つても果しがあるまいといふ意。果無坂の果無しに、修繕の果しがない事と、五月雨の何時晴れ上るか果しのない事とをかけたのである。

【鑑賞】 旅中の輕い卽興で、つまらぬ洒落である。ただから表現されると、此の坂道が急坂で、熊野神社へ參詣する人に、難儀を與へるといふ意味は想像されよう。

髮剃や一夜に金精て五月雨　九兆

【語意】 原本に金情てとあるが、金精ての誤記である。

【句意】 梅雨になると、双物はよくさびたがるもので、髮剃などは乾いた布につゝみ、箱に入れて外氣にふれさせないやうにして置くが、一夜の中にさびて了ふといふ意。

【鑑賞】 髮剃は日頃よく磨いで、切れるやうにして置かなければ役に立たない。鹽氣が付くとすぐさびる。その髮剃も一夜の中にさびて了ふといふのだから、梅雨のじめ〳〵した氣持はよく表れてゐる。他の双物がさびるのでは平凡である。髮剃だから特殊な感じがする。そこに新しみがある。

日の道や葵傾くさ月あめ　芭蕉

【語意】 日の道—太陽のコースといふ意ではない。日のさす道である。葵—圓い五の稜を持つて互生する葉を有し、莖は直上する。春の頃葉間に白紫の花を開く。種類は多いが、

こゝでは普通野生の葵を言つたものである。古來向日葵説があるが誤である。

【句意】 道端に葵が梅雨の暑い日に照らされて萎れてゐる光景である。

【鑑賞】 葵の葉は柔く日に弱いものだから、五月雨の強い太陽を受けると萎れる。その狀が如何にも可憐な感を惹起す。

縫物や着もせでよごす五月雨　羽紅

【句意】 夏着が出來上つた。まだ着て見ない中に、汚して了つた。嫌な梅雨じめりである。

【鑑賞】 着もせでよごすが、獨り合點で、汚した事情が分らないといふ人もあるが、ただそれだけの表現で、汚した事情は連想がつく。作者が婦人だけに、細かいいら〳〵した氣持はよく出てゐる。梅雨時はすべてジメ〳〵して、白い着物は殊に汚れ目が眼立つ。疊のかびだか、濕りだか、そんなせんさくはいらない。何となく汚れ易い、丹念に縫ひ上げて着もしない中にしみが付いては、いら〳〵しよう。その氣持が句の中心生命である。

七十餘の老醫みまかりけるに、弟子共こぞりてなくまゝ、予にいたみの句乞ひける。その老醫いまそかりし時も、さらに見しれる人にあらざりければ、哀にもおもひよらずして、古來まれなる年にこそといへば、とかくゆるさゞりければ

六尺も力おとしや五月あめ　其角

【語意】 六尺―陸尺。こゝでは醫者の駕舁を云ふ。昔は醫者の陸尺は、病家先から心附を貰つたもので、流行る醫者になると、給金よりこの方が相當の收入になつた。前書文意、七十餘の老醫が死んだので、弟子共が家をあげて嘆きながら、私に追悼の句を乞うた。併しその老醫（村田忠庵）は生きてゐられた時も、更に見知つた人ではなかつたから、別に氣の毒だといふ氣も起らなかつたので、たゞ古來稀なる年である、年には不足もあるまい

といふやうな、一遍の悔を述べて、すませようとしたが、弟子共が一向許してくれないので、此の句を作つた。

【句意】 五月雨が降り續いて道が悪い。かうした時に先生のお供をして、病家先を廻ると思はぬ身入りがあつた。併し今は先生も亡くなられて、さぞかし陸尺共は力を落したことであらう。

【鑑賞】 其角の活達な氣象が表れて面白い。陸尺も力落しやと言つた無遠慮な表現が、却つて此の句の調を莊重にさせる。

百姓も麥に取りつく茶摘歌　去來

【語意】 取つく—取りかゝる。

【句意】 麥が熟れたので、百姓も麥の刈取りに取りかゝつて、忙しく働いてゐる。附近の茶山から茶摘歌が聞える。麥を刈る百姓も唄を歌ふ。茶を摘む男女も唄を歌ふといふ光景。

【鑑賞】 初夏の田園の農事がよく描かれてゐる。取付くで少し切れて、茶摘歌と言つた處に、句意を複雑にする用意がある。

しがらきや茶山しに行く夫婦づれ　正秀

【語意】 しがらき—信樂。近江甲賀郡信樂谷。東西三里、南北五里にわたる谷地。茶山しに行く—茶を摘みに行く。茶山は茶畠。

【句意】 夫婦連れ立つて茶をつみに行く光景である。

【鑑賞】 信樂の里は古來茶の名所で、古典味の豐かな地であつた。夫婦連といふと平和な樂しい趣があつて、信樂の茶つみに感じがよく合ふ。そこが此の句の取柄で、信樂の茶に對してなつかしい連想を持たせる。

つかみ合ふ子供のたけや麥畠　膳所　遊刀

【語意】 **つかみ合ふ**—喧嘩する。**たけ**—丈。高さ。

【句意】 麥の穗にかくれて、附近の百姓の子供が喧嘩してゐる。子供の丈は麥の高さと同じ位であるから、姿は麥にかくれて見えない。髮の毛をつかんだり、振上げた拳などが、ちらちら見えるといふ意。

【鑑賞】 素朴な田園生活の句である。惡太郎の喧嘩も野趣があつて面白い。「嵯峨日記」、四月廿日の條下に、「北嵯峨の祭見んと、羽紅尼來る。去來途中の吟とて語る。」(去來は前日京にかへつた)とある。「去來抄」によると、凡兆は麥畠は麻畠に動きはしまいかといふ。去來は麻でも蓬でも構はないと互に論ずる。芭蕉之を聞いて、又動く動かぬの論がやかましい、無用だと言つて制したとある。恐らく凡兆の反對があつたので、去來が此の句を遊刀に與へたのであらう。遊刀に之に似た句があつたものか。

孫を愛して

麥藁の家してやらん雨蛙　智月

【語意】 **孫を愛して**—此の句は元來智月が子乙州の東武行を送つたもので、その際乙州は子供を連れて行つたと見える。後猿蓑撰の時、孫を愛してといふ前書に改めたのである。**麥藁の家**—麥藁で作つた家。西鶴の文に、「里の童、ねぢかご、雨蛙の家などして、云々」とあるから、當時の兒戯であつた。始めは蛙合戯の時死んだ蛙を入れて弔つた家であつたが、後には無理に蛙を殺して入れて遊ぶことになつた。勿論麥藁の家は雨蛙の家であるがこゝでは雨蛙を捕へて入れて置く家位に輕く考へたい。

【句意】 雨蛙よ。麥藁の家をこしらへてやらうから、入つて居なさいといふ意。智月が孫の爲に雨蛙の家を作つてやるのである。

【鑑賞】 孫を愛する老母の情はよく出てゐる。子供の遊にふさはしい雨蛙の家だから殊に感が深い。

麥出來て鰹迄食ふ山家哉　江戸　花紅

【句意】麥がよく實つて、山家が非常な景氣で、鰹迄食ふやうになつたといふ意。

【鑑賞】鰹迄食ふと言つた所に、平生は淋しく魚などめつたに食つたことの無い山家を想像させる。初鰹などと言つて、江戸つ兒は見榮に高價の魚を買つて喜んだものであつた。四月の季になつてゐるから、この鰹も初鰹か或はそれに近い時季のものであらう。たいした句ではないが、鰹を捻出した所に麥の豐作の山家生活を面白く考へさせる。

しら川の關こえて

風流のはじめや奥の田植うた　芭蕉

【語意】**しら川の關こえて**—元祿二年の「奥の細道」に、「すか川の驛に等窮といふものを尋ねて、四五日とゞめらる。先白河の關いかにこえつるやと問ふ。長途のくるしみ、身心つかれ、且は風景に魂うばはれ、懷舊に腸を斷ちて、はかゞしう思ひめぐらさず。」とあつて、此の句出る。**奥の田植うた**—支考の「本朝文鑑」に、東曲（あづまぶり）と題し、生佛坊作として、「かさやたんひやはどもかうもせうに、へイふの二俵がちんばかな」の唱歌をあげ、「狂云、此曲は奥の田植歌にして、へふとは配付を云ひ、ちんばかとは不埒を云へる。總て笠・踏皮（たび）の榮耀はともあれ、二俵の年貢が氣の毒となり。云々」と註する。又自得の「美蓉文集」に、奥州田植うたと題し、彌（やん）十郎口上として、「あすは大だんなのお田植だが、しつたかしらぬか、太郎次郎からすの八番鳥に、むく〳〵むつくりと、むくしり起き、大くろ小くろすみのくろ、上の町の一みな口、そろりそつと引こんで、はし〳〵とかくべいぞや」、以下苗取・朝はか・畫上り・曲・夕暮・上りはかの唱歌六章をあげる。公石の「小鏡」に、陸奥の風俗唄の唱歌と題して、「オセンヤ〳〵オセン女郎、そなたのさしたる笄は、買ろたか、買うたか美しや。買ひも買ひもせぬ。市右衞門殿のいちむすこ女房が、泣いて

りんきする。」とある。

【句意】 古來種々の說があつた。その主なるものをいふと、一、奧州の田植歌は、生佛といふめくら法師が作つた。この生佛は平家物語に節を附けて、琵琶に合せて謠ひ始めた。それは徒然草に見える。故に風流のはじめと言つたのである(菅菰抄)。二、奧の細道に、白川の關を越えてとある。鄙の果であるから、物やさしき事もあるまいと思つてゐるのに昔めいた田植歌を唄つてゐる。これは風流のはじめであらう(師走袋)。三、白川の關を越えて、奧州へ來たのだから、奧州の風流の始に田植歌を聞いた(師走袋中の一說)。四、能の家に風流といふ謠物がある。又狂言にも田植歌といふのがある。すべて上代より歌ひ傳へられたものゝ始は、此の奧州の田植歌から起つたのだらう。さてもしほらしく、ゆかしく、古風なものであるわいと賞める心であらう(說叢大全)。五、此の行脚にはじめて謠物を聞いて、その文句も節も古めかしく思つた。これより行先風流古雅なる事があらうと感じた意(句選年考)。六、催馬樂風俗部常陸歌下に田歌といふ曲名があつた。源氏の引歌にも、常陸歌「ひたちには田をこそ作れたれをかは山を越え野を越え君があまた來ませる」

とある。是等の心をこめて、先に白川の關にて、旅心定まりぬと言つたから、これは奧州の入口だから、風流のはじめと言つたのだ。常陸歌にもあるし、田植歌を聞いて、彼の催馬樂の田歌を思ひ出して、風流だから面白くも嬉しくもあつたといふ意であらう(奧の細道解)。七、田植歌の唱歌も、古風にだみたる聲を張り上げて歌ふのを、奧羽行脚の風流見聞の始であるといふ意(逆志抄)、などとあつた。併し愚考では、須賀川の等窮に、白河の關いかに越えつるやときかれて、自分は奧の田植歌を聞いて、はじめて風流(俳諧といふ意味だらう)の味を知つたといふ意味だらうと考へる。田植歌が野趣に富み、面白く感ぜられたので、かう卽興的に言つたものだらうと思ふ。上代の謠物はこの田植歌に始まつたとか、或はこれから先の風物が、いよいよ古雅になるだらうといふやうな意味ではあるまい。芭蕉の句には古事によつたものが多かつたから、或は其の際田植歌を聞いて、催馬樂の常陸歌を連想したり、又は榮華物語の御裳濯の卷の田樂などを思ひやつて作つたかも知れないが、芭蕉はただ田植歌の俳味に富んだ所を賞めて、風流の始と打興じた迄ではなからうかと思ふ。

【鑑賞】可もなし、不可もなしといふ位な句である。風流の始をむづかしく考へると、一層つまらぬ句になつて了ふ。

出羽の最上を過ぎて

眉掃を面影にして紅粉の花　芭蕉

【語意】出羽—羽前・羽後。最上—最上川中流地方をいふ。眉掃—婦人の化粧道具。お白粉をつけた後で、眉を掃ふ小さな圓い刷毛。紅粉—高さ三四尺餘の草本。莖に刺がある。五月薊に似た紅黄色の花を開く。その花をしぼつて染料にする。

【句意】紅粉の花が眉掃によく似てゐるといふ意。

【鑑賞】紅粉の花に對して眉掃を連想した所に、可憐な感がある。

法隆寺開帳、南無佛の太子を拜す

御袴のはづれなつかし紅粉の花　千那

【語意】法隆寺—大和平群郡にある。聖德太子御草創。開帳—厨子の帳を開いて、その内の佛體を拜ませる事。南無佛の太子—聖德太子の御名。大鏡に、「太子二歳の時、二月十五日東方に向ひて、南無佛と唱へ給ふ。御手の内に釋迦の左眼ありしとかや。毎日午刻七ツ鐘にて、拜禮を許すと。」ある。又逆志抄に、「大和國法隆寺南無佛の太子は、聖德太子二歳の御像にして、御袴を召させ給ふなり。云々」ともある。芭蕉が二度御開帳を拜みに行つた事が三册子に見えた。

【句意】聖德太子樣の御袴の色と紅粉の花との取合である。太子樣の御開帳を拜觀すると御袴の赤い緋の端が、帳の間からほの見えて、恰も紅く咲いた紅粉の花を見るやうな感がするといふ意。

【鑑賞】 上品な尊い感のする句である。なつかしと言つた主觀が、その敬虔な氣持を特に表してゐる。

田の畦の豆つたひ行く螢かな　伊賀萬乎

【語意】 畦—田畠の中に、土を盛り上げて、長くつゞけたもの。畦。去來抄に田のへりとある。「もとは先師の斧正ありし凡兆が句也。猿蓑撰の時、凡兆曰、此句見る所なし。除くべし。去來曰、へり豆を傳ひ行く螢の光、闇夜の景色、風姿ありといふ。凡兆許さず。先師曰、兆もし捨てば我拾はん。幸伊賀の連中の句に是に似たるあり。夫を直し、此句となさんとて、終に萬乎が句となしけり。」とある。

【句意】 去來の說明にて分明。

【鑑賞】 田野の寫實として、さう惡くない句と思ふ。凡兆が承知しないのは、芭蕉の斧正が氣に入らなかつたものか。

膳所曲水の樓にて

螢火や吹きとばされて鳰のやみ　去來

【語意】 膳所—大津の東にある町。曲水—菅沼曲水(作者略傳參照)。鳰のやみ—琵琶湖の闇。

【句意】 膳所曲翠の二階から螢を見た光景。螢が湖上を渡る凉風に吹かれて、其の後がまつくらになるといふ意。

【鑑賞】 吹き飛ばされてが活躍してゐる。今迄點々と諸所に飛んでゐた螢が、風に吹かれて一度にパツト消えて了ふと、その後の湖上の闇が一層濃く深く窺はれる。面白い光景である。

勢田の螢見　二句

闇の夜や子供泣出す螢舟　九兆

【句意】 勢田の螢を見に行つた。闇の中に螢舟が散在する。どこかの舟で、子供が夜のやみに恐れて泣出したといふ意。

【鑑賞】 平凡な句のやうであるが、子供泣出すと言つた所に、闇夜の恐しさがよく出てゐる。螢が風に吹かれて、消えたり、光つたりする樣迄想像される。

螢見や船頭酔うておぼつかな　芭蕉

【句意】 螢を見に行つたら、船頭まで酔つて了つて、危つかしいといふ意。

【鑑賞】 前句の九兆と共に螢を見に行つた時の句である。元祿三年の夏の吟。輕い即興で滑稽味はあるが、平凡を免れない。

三熊野へ詣でける時

螢見や爰おそろしき八鬼尾谷　長崎　田上尼

【語意】 三熊野—紀州熊野三社の別名。本宮・新宮・那智にあつて、三社權現と言はれる。八鬼尾谷—通旨に、「八鬼山は熊野尾鷲より三木へ越ゆる峠にて、登り五十町、下り三十八町、峠に日輪寺といふ寺あり。麓に入海あり。甚嶮路なる由。云々」とある。

【句意】 八鬼尾谷は深山・幽谷であるから、谷間を縫つてあやしく光る螢火が物凄く思はれたのである。

【鑑賞】 谷の螢見も變つてゐるが、熊野權現へ參詣した時の螢見物で、こゝが螢の名所であつたのかも知れない。婦人の感情としては恐しきは實感であらうが、その表現が拙い。

あながちに鵜とせりあはぬかもめ哉　　尚白

【語意】 あながち—無理に。強ひて。せりあはぬ—競ひ合はない。

【句意】 川か入海に、鵜と鷗が浮んでゐる。鵜は長い嘴を水に入れて、忙しく食物をあさつてゐるが、鷗はそれに構はず、悠々と水上を泳いで行く。

【鑑賞】 元祿俳人の脱落したユーモラスな氣質(カタギ)が出てゐる。かうした觀照は丈草の時雨かけぬくの句と共通してゐる。

草むらや百合は中〳〵花の顔　　半殘

【語意】 なかなか—却つて。

【句意】 叢の中に、首を伸ばして美しく咲いてゐる百合の花の方が、却つて他のみどりの草よりも、好もしく思はれるといふ意。

【鑑賞】 なかなかと言つた主觀が中心だらうが、たいした句ではない。百合も山百合などの清楚な可憐な花であらう。

病後

空つりやかしらふらつく百合の花　　大阪　何處

【語意】 空つり—逆上。病後眼まひのする事。

【句意】 病氣が少しよくなつたので、庭へ出て見ると、そこらに百合が咲いて、花首を風にゆられ、ふらふらさせてゐる。自分もまだ病氣が十分直らず、草を見たり、木を見たりすると、百合の花のやうに、ふらふらと眼が廻るといふ意。

【鑑賞】 百合の花の搖れる事と、自分がふらふらする事とをかけ合せたのである。輕い氣持の句。

涼風や我より先に百合の花　乙孤

【句意】朝の涼風に吹かれて、畠でも歩いてゐると、百合の花が自分より先に、涼しさうに風にゆられてゐるといふ意。

【鑑賞】我より先にがよい。之も輕いユーモラスの句である。かうした感情は生溫つこいが、俳味があつてよいとされたのであらう。

燒レ蚊辭を作りて

子や泣かん其子の母も蚊の食はん　嵐蘭

【語意】燒レ蚊辭—風俗文選卷之二に出る。子や泣かん—萬葉集卷之三、山上憶良、「憶良らはいまはまからむ子泣くらむそのかの母もあを待つらむぞ。」罷レ宴歌である。

【句意】何れへか招かれて、十分持成されてゐた時、ふと子供や妻の事を思出し、今頃は可愛い坊やは泣いてゐるだらうか、妻は蚊に食はれてゐるだらうか、などと歸りたがる意。

【鑑賞】憶良の歌の意味をそのまゝ持つて來て、ただ母も蚊の食はんと俳諧的に言ひ換へただけで、作者にはさしたる手柄もない句である。模倣もこんな取柄のない取方では拙い。親子や夫婦の愛情が濃やかに出てゐるといふなら、既に憶良の歌があるではないか。

餞別

立ちさまや蚊屋もはづさぬ旅の宿　膳所　里東

【語意】立さま—立チシナ。

【句意】朝早く起きるとすぐ、蚊帳も外さず、茶も飲まず、そゝくさと出て行つて了ふ有

様を、面白く思つて、贈つた句であらう。

【鑑賞】 無頓著な、あつさりした、俳人氣質がよく表れてゐる。

うとくなる人につれて、參宮する従者(ずさ)にはなむけして

みじか夜を吉次が冠者に名殘哉　其角

【語意】 **うとくなる人**—有德なる人。金持。**つれて**—附き從つて。**從者**—家僕。**吉次が冠者**—吉次は金賣吉次信高で、義經を鞍馬から誘つて、奥州の秀衡の所へ連れて行つた人。冠者はクワジャ、元服した武家の少年。こゝでは牛若丸になぞらへてゐる。前書文意、或金持の人に附いて、お伊勢詣をする召使に、餞する。

【句意】 有福な人を吉次に喩へ、從者を牛若丸のやうな少年にたとへて、吉次が冠者のやうな君に別れて行くのは殘念である。もつととゞめて名殘を惜しみたいが、短夜だから致し方がないといふ意。

【鑑賞】 五元集に、「夏の夜を吉次が冠者に恨哉」とある。それを去來がかう改めたものらしい。其角から言へば、名殘哉よりも恨哉とありたい所であらう。私は直さない方が面白いと思ふ。恨哉の方が、吉次が冠者と言つた洒落に、よくつり合つてゐよう。お前は德な男だ。金持の旦那について參宮すれば、泊り泊り御馳走も食へるし、物も買つて貰へる。おれはお前にあやかりたい。といふやうな離別の怨言になつて、却て面白い餞別吟となつたらう。

隙明(ひま)や蚤の出て行く耳の穴　丈艸

【語意】 隙明—有明の意。戸の透間が明るくなる事。

【句意】 蚤が食つて困る。いちいち潰すのも面倒だし、暗くもあるしするから、捻つては耳の穴へ入れる。その中主人公もうとうと寢て了ふ。明方になつて、昨夜の蚤が耳の穴か

ら這ひ出すといふ意。

【鑑賞】脱落した簡素な俳人生活である。鉢叩に米を借せと言つた丈艸の事だからなほ更面白い。

下闇や地虫ながらの蟬の聲　嵐雪

【語意】下闇―木が茂り合つて下が暗くなる事。木下闇。地蟲ながら―地虫は蟬の幼虫。一寸位の首の赤い體の白い虫。土中にもぐり、草の根を食ふ害虫。地虫のまゝで。

【句意】玄峰集に、「六本木出て」と前書がある。雀志の註に、「東都麻布六本木なり。近き頃までも、立木生ひ茂りて、蟬の鳴く頃は、さうぐしき位の所なれば、當時はさぞかしと思はれぬ。云々」とある。立木の茂り合つた中で、蟬が地虫の殼を拔け切れない形をして、鳴いてゐる樣である。穴から出て、木の根や低い木の幹に這ひ出して鳴く狀であらう。

【鑑賞】下やみの陰慘な氣持はよく出てゐる。地虫ながらがよい。

客ぶりや居所かゆる蟬の聲　膳所探志

【語意】客ぶり―お客樣になつたやうな氣でゐる事。

【句意】人の家へ客に行つた所、丁寧にもてなされ、そこは暑いからもつと涼しい所へ出なさいとか、ずつと床の前に坐りなさいとか言はれるので、その氣になつてゐると、庭の木立では蟬がやかましく鳴く。今こゝで鳴いてゐたかと思ふと、又あちらで鳴くといふ始末、話してゐる中に居所をかへて鳴き立てるといふ意。

【鑑賞】複雜した事柄を表した句である。居所かゆるといふ詞が、時間を含んで、其場の暑さを想像させる。巧な表現である。

頓て死ぬけしきは見えず蟬の聲　芭蕉

【句意】 蟬はいかにも強さうな聲をして鳴くけれど、それが間もなく死んで了ふ虫であるかと思ふと、淋しい氣がする。人生亦斯の如しで、朝の紅顏は夕の白骨、奢る者久しからず、後悔しても仕方がないといふ意。

【鑑賞】 兀峰の桃ノ實集（元祿六年刊）に、「此句人上渡世、天道地變にもかゝれる名句ならんと、世擧つて云ひ侍りぬ。なまじひに註しても、花實を損ふたぐひなるべし。云々」とある。併し感想も理窟だし、表現も弛緩して、後の月並宗匠の言ひさうな句である。

哀さや盲麻（めくら）刈る露のたま　伊賀　槐市

【語意】 麻―葉は楓に似て長大、丈七八尺に達する。夏の末莖を刈り、皮を脫いで、絲にする。

【句意】 めくらの百姓が、露の雫にぬれて、一心に麻を刈つてゐる狀があはれであるといふ意。

【鑑賞】 淋しい靜かな氣持の句。但し露の玉から涙の玉を連想し、哀さやにかけて解したくない。ただ盲人が露にぬれて、麻を刈つてゐる光景が、淋しい清い感を伴ふので、哀さや、と悲んだものであらう。

渡り懸けて藻の花のぞく流哉　九兆

【語意】 藻の花―流の底に絲のやうな細根をひろげ、夏期水面に五瓣の小白花を開く。

【句意】 田舍の小橋を渡らうとして、ふと下を見たら水面に藻の花が咲いてゐた。美しくは思つたが、恐しくもなつて、渡りかけて、ヂッと下の花を覗いたといふ意。

【鑑賞】 渡りかけてが印象的でよい。藻の花覗くとあるから、橋と水面とに距離のある事が分る。つまり下に清い細流があつて、橋はごく粗末な材木を二三本渡したやうなもの、渡ると搖れさうで、一寸恐しい感がする。その下に藻の花が水を覆うて咲く。あつと思つ

たといふやうな刹那の驚異的な感情が此の句の主眼であらう。

舟引の妻の唱歌が合歡の花　千那

【語意】舟引—川の岸に上つて、舟の帆柱に綱をかけて、舟を引き行く人。大鏡に、舟引唄を揭げ、「花にねぶたき、魚にねぶらず、我は夜すがら、いねでせこ待つ。」とある。合歡の花—合歡の木の花。合歡は高さ丈餘に達する木で、その葉夕に凋み、朝に生きかへる。夏期枝の先に、淡紅色の絲の如き花を開く。

【句意】田舍道を通ると、傍に合歡の花が咲いてゐた。日中であるから、葉の色も活氣なく、花も物憂げに見える。その合歡の木蔭に、舟引の妻が歌を唄ひながら、何か仕事してゐた。舟引の妻の唱歌も眠たげにあはれに聞えたといふ意。

【鑑賞】舟引の妻と合歡の花の取合である。合歡の花は淡紅色で、弱い柔い感がする。その葉もさうで、全體に女らしい感の木である。それが一寸艶つぽくて、舟曳の妻の唄と調和する。

白雨や鐘きゝはづす日の夕　史邦

【語意】白雨—夕立。

【句意】夕方に急雨が沛然と降つて來た。その土砂降りの音に紛れて、入相の鐘を聞き外して了つたといふ意。

【鑑賞】鐘聞き外す、日と夕と切つて讀んで味ふべきである。鐘聞き外す日の夕と、日を外すへ附けてはいけない。日の夕とは夕暮の事である。日暮に夕立が降つて來て、鐘を聞き外して了つたといふ所に、此の句の妙味があるので、日の夕だから、夕立に鐘聞き外すが面白いのである。

素堂之蓮池邊

白雨や蓮一枚の捨あたま　嵐蘭

【語意】素堂は深川の阿武といふ所に隱棲して、蓮を愛し、荷興十唱の作もあつた。**捨あたま**—世を遁れた坊主頭。捨坊主。

【句意】素堂の庵へ行く途中の事であらう。一枚の蓮の葉を坊主頭にかぶつて、夕立の中を飛んで行く光景である。雨に濡れてもよい。どうせ浮世を捨てた頭であるからといふ氣持もある。

【鑑賞】洒脫な趣がある。

日燒田や時々つらく鳴く蛙　乙孤

【語意】**日燒田**—太陽に燒け付いた田。

【句意】雨が降らないので田水も涸れ、田にひゞが入つた。蛙が時々苦しさうな聲をして鳴き出すといふ意。

【鑑賞】時々つらく鳴くが印象的でよい。

日の暑さ盥の底の蠔かな　九兆

【語意】蠔—逆志抄に、「蠓蠔と熟字にしてまくなぎとも訓ず。又さしとも訓ず。……蚊の小きものをいふなり。それが朽ちたる木などに、細く糠をかけたる如く生じたるをすむしといふなり。雨濕によりて生じ、日を見て死すと云。」とある。辭書に、浮塵子と書いて、體の長さ二分許の稻の害蟲とあるが、此の場合のうんかはそれではない。

【句意】盥の底は暗く、濕氣があるから、暑い日などうんかが黑く固まつて集まる。その光景。

【鑑賞】雨も降らず、地は乾き切つて、附近の草も埃にまみれ、萎れてゐるやうな時、井

戸端などで、盥の底を起して見ると、うんかが黒く固まつて附いてゐる。その氣味の惡さ。印象的な句である。

水無月も鼻つきあはす數寄屋哉　同

【語意】水無月—六月。鼻つきあはす—鼻がつかへる狹さ。數寄屋—茶室。普通四疊半。

【句意】六月の暑い日に、鼻を突き合はすやうな狹い室に、五六人の人が集まつて、茶の湯の稽古をしてゐる狀である。

【鑑賞】茶の湯は靜肅な行儀正しい作法であるから、一層狹い茶室の暑さが思ひやられる。龜翁の茶の湯とて冷き日にもの句と同巧であるが、此の句の方が暑い印象はよく出てゐる。多少冷笑味の入つてゐる句だが、そこは俳人の人生觀で面白い所だらう。

日の岡やとがれて暑き牛の舌　正秀

【語意】日の岡—大鏡や東海道名所圖會によると、日の岡は山城ノ國宇治郡、京と大津の間、一里塚の西の筋で、峠路になつてゐる。昔木食上人こゝに庵を結び、阪路を平にし、往來の人や車牛に慈愍を施した所であるといふ。こがれて—焦れて。乾いて水氣がなくなる。

【句意】日の岡峠を上る牛が、暑さに喘いで、長い舌を出して、苦しさうに車を曳いて行く光景。

【鑑賞】牛の舌が焦れて暑きによく利いてゐる。實境の印象句。

ただ暑し籬によれば髮の落つ　木節

【語意】ただ暑し—ただわけもなく暑い。籬—竹などで粗く編んだ垣。髮—女の頭の拔毛であらう。

【句意】ただ譯もなく暑いので、庭へ出て籬の側へ行つて見ると、女の拔毛が落ちてゐた。何となくいやな感がして、一層暑苦しく思はれたといふ意。

【鑑賞】髮の落つが印象的でよい。髮の毛が落ちてゐたので、いやらしく、氣味の惡い氣がして、暑さを一層強く感じさせた。

じねんこの藪ふく風ぞあつかりし　野童

【語意】じねんこ—自然粧。竹の實である。竹に實がなると、その竹は枯れて了ふ。

【句意】實がなつて、枯れかかつてゐる竹藪の風が、暑かつたといふ意。

【鑑賞】じねんこの藪が暑によく利く。新味のある寫實句。

夕がほによばれてつらき暑さかな　羽紅

【語意】よばれて—御馳走になる。招待される。

【句意】夕顏汁の馳走に招かれて、つらい暑い目に逢つたといふ意。

【鑑賞】作者が女だから、辛い思が察せられる。暑いと言つて、扇を荒く遣ふわけにも行かず、肌を脫ぐわけにも行かず、坐を崩す事も出來ず、さぞかし困つた事であらう。

青草は湯入ながめんあつさかな　江戸巴山

【語意】湯入—湯に入る事。

【句意】夏の青草は目がまふ位暑苦しいものである。日中ただ眺めてゐてはたまらない。湯に入りながら眺めれば、暑さもいくらかうすらいで、凌ぎよいといふ意。

【鑑賞】湯入ながめんが面白い。殊に青草はと、暑い對稱物を眞先に示したのであるから特殊な場合の印象を表すべく、湯入り眺めんと言つたのであらう。そこに新味がある。

千子(ちね)が身まかりけるをきゝて、みのの國より去來がもとへ申しつかはし侍りける。

無き人の小袖も今や土用干　芭蕉

【語意】千子—去來の妹。長崎の御船手清水藤右衞門に嫁し、一子をあげる。元祿元年五月歿。美濃の國より—元祿元年夏既白の案内で、大垣・岐阜などに遊んだ時の事である。小袖—絹の綿入。前書文意。千子が死んだといふ事を聞いて、美濃の國から去來の許へ言ひやつた。

【句意】亡人千子の小袖も、今は土用干する事になつた。人生朝露の如し。いかにも感慨無量であるといふ意。

【鑑賞】千子を悼む情は出てゐるけれど、たいした句ではない。

水無月や朝めしくはぬ夕すゞみ　嵐蘭

【語意】水無月—六月。

【句意】眞夏になると、朝飯は食ひたくない。朝飯をぬきにして、夕飯をしたためて、風に吹かれて、涼に出るといふ意。

【鑑賞】朝飯食はぬ夕涼が、俳人の氣樂な世界であつた。

じだらくにねれば涼しき夕べかな　宗次

【語意】じだらく—行體の不取締な事。

【句意】じだらくに寢れば涼しいといふ意。

【鑑賞】去來抄に、「猿蓑撰の時、今一句の入集を願ひて、數句吟じ侍れど、取るべき句なし。一夕先師の傍に侍りけるに、いざくつろぎ給へ。我も臥しなんと仰せられければ、

お許し候へ。じだらくに居れば、涼しく侍ると申しければ、先師曰、是こそ發句なれとて今の句に作りて、入集せさせ給ひけり。」とある。技巧しないで、率直に實情を言つた所がよいのである。併しかゝる態度の句作から、往々淺つぺらな安價な句の出來る事を、注意しなければいけない。

すゞしさや朝草門ゝに荷ひ込む　九兆

【語意】門ゝ―音讀する時に、漢字の右下に小さく撥音の假名を付ける。朝草―打聽に、「馬の飼葉にする草を、朝早く刈りに出づるを、朝草刈といふ。」とある。

【句意】朝早く飼葉にする草を刈り取つて、門内に荷ひ込む光景である。大百姓の家。朝だから草も生き〳〵として、露にぬれ、いかにも涼しさうに見える。

【鑑賞】朝草の刈入れがよい。涼しさによく適合する。

唇に墨つく兒のすゞみかな　千那

【句意】寺の兒が唇に墨を附けて涼んでゐる狀である。手習のためであらう。

【鑑賞】無邪氣な可憐な兒の樣子がよく出てゐる。

月鉾や兒の額の薄粧　曾良

【語意】月鉾―祇園の祭禮に出る山車の名。山車に鉾と月とあつた。祇園の祭は、五月朔日の致齋に始まり、二十日の吉符入、晦日の神輿洗、六月朔日の鉾の兒祇園參り、五日鉾の引初め、六日宵宮飾、七日が本祭、午前六時から山鉾列を正し、四條通より京極を南へ松原を西へ引渡すのである。月鉾は山車の上に、長刀やうの鉾を立て、兩輪の車を二條の綱で引き、車の床の正面に、寶冠をいただき、腰に羯鼓をつけた兒が坐り、左右から小童團扇であふぎ、笛・鉦・太鼓ではやし立てゝ押し行くのである。その裝儀の華麗なる事人

の目を奪ふばかりであつた。

【句意】 月鉾の上に乘つた兒が、額にうす化粧して踊つてゐる樣の美しさを言つたもの。

【鑑賞】 祇園祭の華美がよく表れてゐる。

夕ぐれや岷並びたる雲のみね　去來

【語意】 岷—崛岷と熟し、禿山を形容したもの。雲のみね—夏の入道雲。陶淵明の詩句に「夏雲多二奇峯一」とある。

【句意】 夕日が入道雲の端に反映して、眞紅な禿山が幾つも並んでゐるやうに見えるといふ意。

【鑑賞】 夏の夕の蒸し暑い樣が眼前に見える。

はじめて洛に入りて

雲のみねは比叡に似た物か　大阪之道

【句意】 大阪から京へ入つて行くと、比叡の方角に當つて、大きな雲が聳えてゐる。之は必ず比叡山だらうと思つて喜んでゐると、それは雲の峯で、それもいつの間にか形を崩して了つた。今眼先にあつた山は雲の峯であつたか、よく比叡山に似て居つたなあと驚く樣である。

【鑑賞】 複雜した心理の句で、はじめて京に入つた氣持がよく出てゐる。

炆

秋風や蓮をちからに花一つ　不知讀人

此句東武よりきこゆ。もし素堂か。

【語意】炆—秋の本字。飆風—飆は秋の古文。蓮—こゝでは蓮の實をいふ。

【句意】秋風の吹く蓮池の光景である。蓮の花も大方咲きつくし、ただ一つの小い花が破れた葉の間から見える。この淋しい蓮池の上を、秋風が吹き渡つて行く。蓮は—その一つの花は、その實を力にして咲いてゐるといふ意。

【鑑賞】蓮を力にと言つた主觀が、俗であり、平凡である。註は撰者の施したものだらうが、素堂の作らしくもない。

がつくりとぬけ初むる齒や秋の風　杉風

【句意】齒が拔け始めた。秋風が淋しく吹く。自分の老がまざまざと佗しく感ぜられるといふ意。

【鑑賞】作者は病弱の人であるから、かうした氣持は痛切に味へられたであらう。しみじみする。

芭蕉葉は何になれとや炆の風　路通

【句意】秋風が芭蕉の葉を吹き捲つて、バサ〳〵に裂いてゐる。一體何になれと言つて、風はこんなに荒く吹き付けるのだらうか。

【鑑賞】 芭蕉といふ草は風に破れ易いもので、若葉の頃は青々とした柔い姿を見せてくれるが、秋もやゝ深くなると、風に破れ、霜に枯れて、見にくい姿となる。さうした芭蕉であるから、何になれとやといふ痛ましい主觀も起るのであらう。

人に似て猿も手を組む秋のかぜ　玲碩

【句意】 人間のやうに猿も手を組んで、秋風の吹く木末に淋しく止つてゐるといふ意。

【鑑賞】 猿も手を組むといふ事柄が既に俗である上に、人に似てと來ると、一層いやになる。俗な觀念がいけない。

加賀の全昌寺に宿す

終夜秋風きくや裏の山　曾良

【語意】 全昌寺—大聖寺の町外にある曹洞宗の寺。奥の細道によると、曾良は腹を病んで伊勢の長島の親類の方へ旅立つた。芭蕉は大聖寺の城外全昌寺に泊つた。なほ加賀の地である。曾良も前夜此寺に泊つて、秋風の句を殘して行つた。

【句意】 師翁と旅の苦樂を共にして來た自分は、今病氣になつて一足先へ立つ事になつた。行く者の悲、殘る者の恨は、ひとり芭蕉ばかりではない。禪院の衆寮に臥して、來し方を思ふと、萬感胸に浮び、寢つかれない。裏山の杉木立に、終夜秋風が騷しく吹き落ちて、とう〳〵明方迄眠れなかつた。

【鑑賞】 落着いた、寂のある、しみ〴〵する句である。

蘆原や鷺の寢ぬ夜を怀の風　江戸　山川

【語意】 蘆—水草。春宿根より生じ、枝なく、葉・莖共に竹に似る。秋白い穗狀の花をひ

らく。鷺—水禽。形鶴に似、嘴・頸・脚共に長い。眼の周に毛無く、裸出する。魚を捕りて食ふ。

【句意】 蘆原に夜すがら秋風が騒しく落ちて、水邊の鷺の眠を妨げるといふ意。

【鑑賞】 蘆原の鷺が、終夜風に吹かれて、やかましく騒いでゐる事を、鷺の寢ぬ夜と斷定して、風の蘆原の淋しさを強めてゐる。そこに一寸した技巧がある。

あさ露や鬱金畠の秋の風　九兆

【語意】 鬱金—茗荷科の草で、高さ二尺許、形だんどくに似てやゝ大。秋白花をひらく。根は香料或は染料となる。

【句意】 朝露にぬれた鬱金畠の靜かな秋風を示したもの。

【鑑賞】 朝の鬱金畠の清新な感はよく描かれてゐる。秋風も靜かな秋風である。露にぬれた鬱金の葉や花が柔に搖れる程度である。

はつ露や猪の臥す芝の起きあがり　去來

【語意】 はつ露—はじめて見る露。秋の始である。猪の臥芝—猪の臥す芝と讀みたい。猪が寢てゐた芝草。和歌の伏す猪の床。

【句意】 夜來猪が寢てゐた芝草が、朝になつて露にぬれて、生き〳〵と起上つたといふ意。

【鑑賞】 露置く芝はやさしい可憐な感のもの、猪は荒い猛き感の動物、その反對な氣持の二の材料の取合が、露にぬれた芝草の活き〳〵した現象をよく表してゐる。起きあがりも細かな表現でよい。

大比叡やはこぶ野菜の露しげし　野童

【語意】 大比叡—比叡山をいふ。比叡山は延暦寺のある山で、帝都鎮護の靈山である。内

に東塔・西塔・横川等の伽藍があり、數多の勝地を含む。

【句意】 比叡山の僧坊に入れる野菜の、露にぬれてすがすがしい狀を言つたものか。一說に京都東北の村々から、朝早く野菜を京へ運ぶ狀であるといふ人もある。

【鑑賞】 比叡の僧坊へ入れる野菜としても、又京へ出す野菜としても、何れも拭ふ如き秋晴の朝、露にぬれた新鮮な野菜の夥しい數に感動した氣持の句である。大體としては平凡な事柄であるが、大比叡だから面白い。

三葉ちりてあとはかれ木や桐の苗　九兆

【句意】 四五枚位しか葉の附いてゐない桐の苗が、秋風に逢つて三枚散つて了つたら、あとは枯木のやうになつたといふ滑稽さを言つた句であらう。

【鑑賞】 俳人のユーモラスな見方が面白いのだらう。秋の自然の凋落を暗示するといふやうな生眞面目な句ではないらしい。

文月や六日も常の夜には似ず　芭蕉

【語意】 文月―七月。六日―七月七日は七夕で、その前夜。

【句意】 七夕の前夜即ち六日も普通の夜とは違つて、何となく艶めかしいといふ意。

【鑑賞】 奥の細道の句。雪丸げに、「直江津にて」と前書する。桃隣の粟津ヶ原に、「七夕の發句古來より手向けたるは、げに星の數も及ばず。しかれども多く七夕の夜の事のみさまゝにいひかはりて侍る。其中に師の句の、文月や六日も常の夜には似ず、是等も吾妻路には知らず、上方筋にてはうけとりたる句なり。云々」とある。上品な高雅な句である。

合歡の木の葉ごしもいとへ星のかげ　同

【語意】 合歡の木―ネブノキ、ネムリノキともいふ。高さ二三丈、枝繁茂し、葉細く、對

生する。サイカチの葉に似る。暮になると、葉が互に相寄つて、眠るやうになるが、朝に又ひらく。仲夏枝の先に細絲を集めたやうな淡紅色の花をつける。**星のかげ**—二星の傳説である。天の河の東に織女があつた。天帝之を河西の牽牛に嫁がせた。之がため織女機を織らなくなつたので、天帝大に怒り河東に呼戻し、年に一度天の河を渡つて牽牛と會ふ事にした。それは七月七日の夜で、織女は烏鵲の翼の橋を渡つて、牽牛と會ふ事を樂んだといふ。

【句意】牽牛・織女の星を見る人に言つた句である。合歡は合ひ歡ぶ木と書いて、今宵に似合はしいなつかしい名前の木であるが、二星は年に一度天の河を渡つて相會ふ契であるから、一晩中眠らないで、積る思を語り明かすだらうから、星を見る人よ、合歡の木のやうな茂り合つた木陰に隱れて、葉越しからでも見ないやうにして下さいといふ意だらう。合歡の木は葉が細かく茂り合つて、星の契をかいまみるには、都合のよい木であるが、その葉越しも遠慮して貰ひたいといふ所から、葉越しもいとへと言つたものだらうと思ふ。

【鑑賞】古來種々説のある句であるが、それは葉越しものもが、解釋を多岐にした原因であらう。私の臆説では此のもを輕く取つたらどうかと思ふ。即ち合歡の木は枝葉が茂つて空からはよく見えない。こちらから星のぬれ場を見るには都合がよいと言つて、皆合歡の木の下に隱れて見たがるだらうが、一年の思を一夜ではらすのだから、合歡の茂り合つた葉越しも遠慮しなさい。覗かない方がよいといふ意味のもかと思ふ。かう考へると芭蕉の詩人的な優しい情のよく表れた句で好もしくなる。合歡は夜眠る木であるから、星を仰ぐには不適當である。星の契にあやかるためには、眠らないで見るべきである。それには合歡の木は都合が悪いといふやうな意味ではあるまい。古註の徹底しないのは、見る人も眠らないで星を見るがよい、合歡は夜睡る木であるから悪いといふ、ねむりの木といふ意味にのみ拘泥した結果ではなからうか。

七夕やあまりいそがばころぶべし　伊賀少年　杜若

【語意】七夕—こゝでは七夕竹を立てる事であらう。俗間に、兒女が二星を祭るために、

葉の附いた竹に、五色の紙を色紙や短册形に切つて、古歌を書いて結び付け、屋上或は門口に立てる。祭がすむとそれを川に流して了ふ行事がある。

【句意】 子供が七夕樣を祭るために、我も我もと竹を擔いで、屋根や門口に立てようとして喜び騷ぐ狀であらう。餘情として、餘り騷いで轉んだりすると、七夕樣に笑はれますよなどと母や姉に叱られる樣もあらう。

【鑑賞】 子供の無邪氣な動作を率直に表して面白い。

みやこにも住みまじりけり相撲取　去來

【句意】 大兵肥滿の相撲が、優美な花車な都に住んでゐるのを見て、滑稽に思つた句である。

【鑑賞】 觀察の俳諧氣分である所が面白いのだらう。

朝がほは鶴眠る間のさかりかな　伊賀風麥

【語意】 鶴眠る間—保考の打聽に、「鶴は夜一夜子を思ひて鳴きあかす故に、朝はねぶる。そのねぶるほどの盛なりと、短きをいふ。」とある。

【句意】 朝顏は鶴の眠る間花が盛であるとの意。

【鑑賞】 朝顏と鶴との取合である。朝顏の花は爽快な感がする。潔よい。鶴は高雅な鳥で俗つぽくない。二者その感が調和する。一寸奇拔な想像ではあるが面白い。

蕣（あさがほ）やぬかごの蔓のほどかれず　膳所及肩

【語意】 蕣は木槿であるが、我國では朝顏とよませる。**ぬかご**—むかご。山の芋の子。蔓の葉の間に生ずる。食用になる。

【句意】 朝顏の蔓に、むかごがからまつて、そのまゝになつてゐる狀。

【鑑賞】 簡素な田家の生活が表れてゐる。

笑ふにも泣くにもにざる木槿かな　　嵐蘭

【語意】木槿―枝葉の繁茂する所から、多く垣根に植ゑる。夏秋の間、白・紫・紅等の五瓣の花を開く。朝に開き、夕に凋むから、古はアサガホとも言はれた。

【句意】木槿の花は笑ふとも付かず、泣くとも付かない花であるとの意。木槿は美しい花だけれど、田舍びてゐる。陰氣である所から、かう言つたのだらう。

【鑑賞】奇拔な感想とも思へるが、俗な洒落に過ぎない。

手を懸けてをらで過ぎ行く木槿哉　　杉風

【句意】木槿に手をかけて折らうとしたけれど、槿花一日自爲レ榮（白樂天）といふ詩があるから、折らないで過ぎ去つたといふ意。

【鑑賞】一說に、手をかけて見たが、折らないでそのまゝ過ぎ去つたといふさゝやかな好奇心であらうとあるが、相手が木槿であるからどうかと思ふ。好奇心とすると、往々かゝる場合もあるから、無難に意味は解けさうだが、槿花一日榮と言はれる植物であるだけ、折らで過ぎ行くには、何か理由がありさうに考へられる。殊に杉風の淺俗な句風から考へると、一日の榮の果敢ない木槿であるから、風流心を出して折らないで過ぎたとも思はれる。さう思ふと此の句が理窟臭く、月並になる。

高燈籠ひるは物うき柱かな　　千那

【語意】高燈籠―歲時記栞草に、「昔々物語に、昔は死去して其年より、七月高燈籠といふものをたつる。七回忌まで立つるもあり。立てやうは六月晦日長さ五六間（軒とある）の杉丸太、上に三角のいらかを結び、杉の葉につゝみ、四手をきつて付け、燈籠は辻番の行燈の形にちいさく拵へ、上ひらき、下しぼませ、屋根も板にてこしらへ、玄關と臺所の

間の廣みに建て、七月朔日より晦日まで、毎夜暮六ツより（午後六時）明六ツ（午前六時）までともす。一向宗には見えず。他宗はみな〳〵かくの如し。あはれに見ゆるなり。」

【句意】 高燈籠は夜は美しく見えるが、畫は柱が鬱陶しく、いやな氣持になるとの意。

【鑑賞】 淋しい鬱陶しい氣持が柱に殘るのは實感であらう。

はてもなく瀬のなる音や怀(あきつい)徽雨(いり)　史邦

【語意】 瀬—水流の急なる所。怀徽雨—秋の長雨。西馬の標註に、「霏雨(しめり)又ハ微雨カ。」とあるが、日本歳時記に、「徽雨とも書けり。」とあるから、長雨と見た方がよい。

【句意】 秋の長雨のために、川の瀬が果しなく、ゴウ〳〵と鳴る狀である。

【鑑賞】 秋の長雨に水嵩が增して、淺い流の石などに、瀬音を立てゝはげしく流れる實景が、果もなくの詞でよく出てゐる。

そよ〳〵や藪の内より初あらし　且藁

【語意】 初あらし—陰暦七月末から八月頃まで吹く風。

【句意】 竹藪の内から、そよ〳〵と初嵐が吹き始めるといふ意。

【鑑賞】 はじめにそよ〳〵やと置いた所がよい。藪の内から起つてくる初嵐の第一印象はそよ〳〵である。そよ〳〵といふ風音が、物靜かな初秋の裏畠の實感を强く捉へてゐる。率直な表現が却てよかつた。

秋風やとても薄はうごくはず　三川子尹

【語意】 とても—つまる所。

【句意】 秋風が吹くと、どう考へても芒はとどのつまりは動くべきものである。

【鑑賞】 つまらぬ主觀を、意味ありげに言つた所がいけない。

迷ひ子の親のこゝろやすゝき原　羽紅

【句意】 大鏡に、「涯もなき芒原に行きかかりて、東西をも失ふほど、その心、迷ひ子の親の心にたとへたり。」とある。茫々たる芒原を通ると、恰も迷子を探す親の心のやうに、心細く悲しいとの意。

【鑑賞】 果しなき芒原の光景を、主觀的に迷子を探す親の心に喩へた所がよい。やはり婦人の句である。

八瀨おはらに遊吟して、柴うりの文書きける序に

まねき〳〵枴の先の薄かな　九兆

【語意】 **八瀨**—山城國愛宕郡八瀨村。**おはら**—大原。山城國愛宕郡大原村。八瀨・大原共に京の東北山間の地。**柴うりの文**—柴賣の說で、風俗文選卷之四に出る。大原女の生活を述べたもの。前書文意、八瀨・大原に遊吟して、柴賣の說を書いた序に。**枴**—天秤棒。

【句意】 芒を刈り取つて、天秤棒で擔いでゐると、芒が天秤の先で搖れて、來い來いといふやうに、行く人を招いてゐるとの意。

【鑑賞】 歩く度に天秤がしなふから、招き〳〵が面白く感ぜられる。芒を擔ぐ人の姿態・動作がよく出てゐる。

つくしよりかへりけるに、ひみといふ山にて、卯七に別れて

君がてもまじるなるべしはな薄　去來

【語意】 **ひみといふ山**—日見峠である。大鏡に、「日見峠は長崎と日見との間なり。云々」

とある。大日本地名辭書に、「長崎の東二里半、坂路峻險、之を日見峠といふ。直立四百米、嶺を截り、道を開く。」とある。**卯七**—蓑田氏。去來の甥。前書文意、九州から京へ歸る時、日見といふ山で卯七に別れて。

【句意】 峠の尾花が去り行く自分を招くやうに思はれるが、その中にはお前の手も交つて實際自分を招いてゐる事だらうとの意。

【鑑賞】 尾花が人を招く事は、和歌・俳諧に言ひふるされてゐるが、人の手が交るといふ事は陳套を脱してゐる。

草刈よそれが思か萩の露　平田李由

【語意】 思—憂とか厄介とかいふ意に取りたい。標注に、「思ひかヲ重いかニ誤ル本アリ。心ヲ認ムベシ。」とある。

【句意】 草刈よ。お前は露が手足にかかつて、草を刈るに厄介がつてゐるやうだが、萩に置いた露などは一段と風情があつて面白いものだが、それでもいやに思ふかといふ意だらう。

【鑑賞】 思かといふ主觀を、萩の露にかけた所が面白いのだらうが、そこに生ぬるい氣持も殘つてゐる。

元祿二年翁に供せられて、みちのくより三越路にかかり行脚しけるに、かがの國にていたはり侍りて、いせまで先立ちけるとて

いづくにかたふれ臥すとも萩の原　曾良

【語意】 **元祿二年翁に供せられて**—元祿二年芭蕉翁のお供をして。**奥ノ細道**七月の條下に「曾良は腹を病みて、伊勢の國長嶋といふ所にゆかりあれば、先立ちて行くに、行々てたふれ伏すとも萩の原　曾良　と書置きたり。云々」とある。**みちのく**—奥州。今の磐城・

岩代・陸前・陸中・羽前・羽後・陸奥の總稱。**三越路**—越後・越中・越前。**いたはり侍り**て—病氣になつて。**いづくにか**—原句、行き行きてとある。猿蓑撰の時改めたのだらう。山家集に、「いづくにかねぶり〳〵てたふれ伏さむと思ふ悲しき道芝の露」。前書文意、元祿二年芭蕉のお供をして、奥州から北陸にかけて旅行したが、加賀の國で病氣になつて伊勢まで先へ行くと言つて。

【句意】こゝで翁と別れて、遠い伊勢路迄行くのであるが、この病體では行きつくかどうか覺束ない。途中何處で倒れ伏すか分らない。若し倒れたとしたならば、萩の原で倒れたい。それが風雅の道に入つた私の願望であるとの意。

【鑑賞】しみじみした、情味の深い句である。行き〳〵てでもよいが、いづくにかの方が淋しい氣持はよく出る。

桐の木にうづら鳴くなる塀の内　芭蕉

【句意】支考の俳諧古今抄に、「心切（所定の切字を用ひないで、句を切る切方）に多名ある事」の條下、にまはし（上五のにが中七・下五にかかる事）の例句に引かれてゐる。即ち「鶉の一章は田莊の酒家といふ題ありて、こなたより其家の富貴を思ひやりたる樣なりとぞ。しからば五もじに句を切りて、桐の木やといふべけれど、さいふは桐の木の發句ならむ。是は桐にも鶉にもあらず。田家を稱する發句なれば、鶉啼くなりと句を切りて、塀の内を隔つべきにもあらず。況や鶉鳴くなるとは、句法に古歌の截入（たちいり）なるをや（俊成自讃歌、「夕されば野邊の秋風身にしみてうづらなくなる深草の里」の歌を句中に取入れる事）。今やにの字の働を評せば、遠く田莊の白壁を見やりて、其桐の木に富貴を思へばと、爰に心をめぐらすべきや。云々」とある。今支考の説に從ふと、此の句は富める田家を賞めた句で、塀の内に桐の木がある、その桐の木がこんもりと茂つて、如何にも裕福らしい家である、その桐に鶉が鳴いてるといふ事になる。

【鑑賞】切字をまだ大切に考へてゐた時代の句としては珍らしい形のものであつた。が内容はたいして勝れてゐるとも思へない。田莊の酒家とあるが、果して芭蕉がかう題して詠

んだものか、それは分らない。或は支考が勝手に田莊の酒屋にきめて了つたものかも知れない。田家とすれば、句意は大體支考の言ふやうであるが、心切だの、にまはしだのと言つて、句法に制を設けたがる支考の事であるから、此の句が猿蓑に取られて、芭蕉の切字に拘泥しなかつた意中を惡く忖度して、支考が新しい切字の名目の例句に擔ぎ上げて、有名にしたものかとも考へる。

百舌鳥なくや入日さし込む女松原　九兆

【語意】百舌鳥—形つぐみより小さく、頭・脊赤褐色、翅淡黑色、黑白の斑點がある。眼大きく、嘴曲り尖り、尾は長い。秋の頃鳴く聲高く鋭くやかましい。常に蟲を採りて食ふ。女松原—赤松の原。赤松は皮赤く、葉短細、枝柔かである。

【句意】秋の夕日が赤松の幹を染めて赤く、弱々した影を流してゐる。附近で百舌鳥が鋭く鳴き立てゝゐるといふ意。

【鑑賞】客觀表現で、巧を求めず、ありのまゝに言つてゐるが、情景躍如として得がたき句である。

初鴈に行燈とるなまくらもと　亡人　落梧

【語意】初鴈—秋のはじめ北地から來た雁。行燈—木の框で作り、紙を張り、内に燈明皿を置き、油火をともす。

【句意】オヤ雁が鳴く。もう雁の鳴く時候になつたか。何となく淋しい。枕もとの行燈を片付けないでくれといふ意。

【鑑賞】病床吟であらう。しみ〴〵した哀感が痛切に出てゐる。

堅田にて

病雁の夜さむに落ちて旅ね哉　芭蕉

【語意】 堅田―琵琶湖西岸の小驛。病雁―ビヤウガンと讀む人もあるし、ヤムガンといふ人もあるが、私はヤムカリと讀みたい。夜・落・旅寢・皆訓讀してゐる所へ、ビヤウガン或はヤムガンと訓むと、上五が荒くひゞいて、吟聲が面白くない。

【句意】 自分を病雁に喩へた句である。病む雁が秋の夜寒に田か沼へつかれて落ちたやうに、私も旅に病んで、貧しい蜑が苫屋に佗び寢するやうになつた。淋しい事であるといふ意。

【鑑賞】 元祿三年九月の吟。粟津の木曾塚から昌房へ送つた手紙によると、散々風邪をひいて、蜑の苫屋に旅寢した云々とあつて、此の句が出る。去來抄に、此の句と次の句とを並べ、「猿蓑撰の時、此内一句入集すべしとなり。凡兆曰、病雁はさることなれど、小海老にまじるいとどは、句のかけりごと（取合）新しく、誠に秀逸なりといふ。去來曰、小海老の句は珍しといへど、其物を案じたる時は、予が口にも出でん。病雁は格高く、趣かすかにして、いかでか爰を案じつけんと論じ、終に兩句ともに乞ひて入集す。其後先師曰

病鴈を小海老などと同じ如くに論じけるやと笑ひ給ひけり。」とある。併し白氏長慶集に、「困病病夫憐二病鶴一、精神不レ損翅翎傷。」といふ出典があるとすれば、此の句もあまり手柄にはなるまい。それは去來の言の如く、格調の高い事は認めるが、白詩の燒直しでは感心しない。芭蕉は得意らしいが、かゝる境地から出た句はやがて古びて了はう。

海士の屋は小海老にまじるいとど哉　同

【語意】 いとど―コホロギである。西京にてはいとどといふ。鳴くのは雄である。海士―漁夫。

【句意】 漁師の家の庭先か土間の隅に、莚か籠があつて、その中の小海老にコホロギが交つて鳴いてゐるといふ意。

【鑑賞】 海老の中にいとどが入つて鳴くといふ事は、實境を踏まなければ得られぬ事で、漁村の佗しい樣はよく出てゐる。感覺の鋭い、新味のある句である。前の病雁の句より將

來性があらう。

加賀の小松と云ふ處、多田の神社の寶物として、實盛が菊から草のかぶと、同じく錦のきれ有り。遠き事ながら、まのあたり哀におぼえて

むざんやな甲の下のきりぐす　芭蕉

【語意】 **小松**—加賀國能美郡にある。金澤より八里餘。**多田ノ神社**—小松町にある。平家物語に多田ノ八幡とある。奥ノ細道に太田ノ神社とする。**實盛**—齋藤別當實盛。元は義朝の臣、義朝滅亡後宗盛に屬し、木曾討伐に從つたが、加賀ノ國篠原に於て戰死する。**菊唐草**—てつせん。蔓草。夏一莖一花大さ二寸餘の碧色又は白色の花を開く。その草の模樣を彫つた甲を菊唐草の甲といふ。**錦の切**—赤地の錦の直垂の切れ。前書文意、加賀ノ國小松と

いふ處に、多田ノ神社がある。そこの寶物に實盛の菊唐草の甲や赤地の錦の直垂の切があつた。遠い源平時代の事ではあつたが、今眼前にそれを見ると、あはれに思はれて。

【句意】 實盛の形見の甲が納められてある床の下で、コホロギが悲しげに鳴いてゐる。私は實盛の昔話を思ひ出すと、傷しい氣持になるといふ意。

【鑑賞】 奥ノ細道によると、實盛の甲や錦の直垂は、義朝から貰つたやうにあるけれど、平家や盛衰記には宗盛から貰つたとある。又その甲や直垂は、實盛討死後義仲の願狀に添へて樋口ノ次郎を使者として太田ノ神社に奉納したといふのも詳かでない。多田ノ八幡に願狀を納めた事は、大夫房覺明に書かせたもので、それは實盛討死の十日ほど前の話である。發句のむざんやなは謠曲實盛に、「あなむざんやな齋藤別當にて候ひけるぞや。」とある語を取つたので、初案は「あなむざんやな甲の下のきりぎりす」であつたが（去來抄）後にあなの二字を除いたのである。謠曲に出典があるだけ、芭蕉の手柄にもならないが（當時は歷史的に出典のある句を尊んだけれど）、むざんやなと置いた氣持は、實盛の史實を知れば首肯かれよう。義朝が義仲の父義賢を討つた時は、義仲は三歲の子供であつた。義